企画展「戦争と大学
――一九三一～一九四五　官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学――」

蒲生英博・堀田慎一郎

はじめに
一　鶴舞における展示会「戦争と大学」
（一）附属図書館医学部分館のミニ展示会
（二）スクラップブックから始まる「戦争と大学」
（三）展示内容とその特徴
（四）展示会の反響
二　東山における企画展「戦争と大学」
（一）開催決定までの経緯
（二）準備作業の概略
（三）展示内容とその特徴
むすびにかえて

はじめに

本展示記録は、名古屋大学で開催された企画展「戦争と大学―一九三一～一九四五　官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学―」について、内容、開催に至るまでの経緯、準備過程、展示への反響などを紹介するものである。

本稿で言う企画展「戦争と大学」は、正確には時期や場所、内容も異なる二つの展示会両方を指している。一つは、二〇一四（平成二四）年二月一二日（水）から六月七日（土）までを会期に、鶴舞キャンパスの附属図書館医学部分館二階入口ホールにおいて開催された、同分館による第六回ミニ展示会である。もう一つは、二〇一四（平成二四）年八月一日（金）から八月三十一日（日）までの会期に、東山キャンパスの中央図書館二階ビブリオサロンにおいて開催された、大学文書資料室と附属図書館医学部分館の共催による企画展である。

これまで大学文書資料室は、学内の他部局との共催によって、まとまった会期を設定した特別展や企画展を五回開催してきた。ただ、これらはいずれも名古屋大学博物館との共催であり、会場も同館の展示室であった。[1] 今回は、共催相手も展示会場も初めてということになる。しかも、共催相手の展示会に触発される形で、内容を拡充しつつ、しかも別の場所で展示会をおこなうという、おそらく全国的にもかなり珍しいケースであり、展示記録を残す意義も高いと考えられる。また、医学部附属図書館医学部分館は、医学部史料室という医学部のアーカイブズを持っており、今回展示された史料も同室で保存されているものである。本企画展は、同じ大学における二つのアーカイブズの共催展示という稀有な事例でもあろう。

なお、本展示記録の作成は、第一章については蒲生英博（附属図書館医学部分館特任専門員）、第二章および「は

じめに」と「むすびにかえて」は堀田慎一郎（大学文書資料室特任助教）が担当し、とりまとめは堀田がおこなった。両者の調整不足もあり、形式等の不統一が見られるが、時間の関係であえてそのままにした部分もある。

一　鶴舞における展示会「戦争と大学」

（一）附属図書館医学部分館のミニ展示会

名古屋大学附属図書館医学部分館の四階には医学部史料室があり、本学の創基とされる一八七一（明治四）年から今日までの医学部は元より、広く医学史、医療史に関連する資料を所蔵している。

一九七一（昭和四六）年に完成した医学部分館には、すでに「資料室」があったが、今日の医学部史料室の姿となったのは、一九八六（昭和六一）年から一九九八（平成一〇）年にかけて医学部同窓会による卒業三〇周年記念事業として整備されてからである。その後、漸次改善されてはきたが、職員が常駐せず、通常は施錠しているため、資料をより良く、広く活用してもらうには、さらなる飛躍が必要であった。

そこで、所蔵資料の公開を目指して、先ずデジタルアーカイブ化を行ない、医学部史料室とその所蔵資料の存在を広く知らせること、次に、デジタルアーカイブに関心を持った人に、現物に触れる機会を提供することを目的として、二〇一〇年五月に外部資金の獲得も含めた大まかな三年計画を立てた。[2] 幸い計画どおり、外部資金により展示ケースを購入することができ、医学部分館の二階入口ホールの使わなくなっていた図書目録カードのケースを移動し、そこへ設置した。

二階入口ホールは、入館ゲートの手前にあり、市民も気楽に利用できる場所であるが、展示ケースが何とか二台設置できる程度の広さしかないため、ミニ展示会と名づけ、二〇一二（平成二四）年九月から連続して開催してきた。[3] 展示品は、すべて医学部史料室の所蔵資料である。

展示会では、本学医学部・附属病院に関する資料、古医書、文書、写真、絵画、歴史的医療器具等を展示してきた。年代としては、明治、大正時代とそれ以前の近代医学の黎明期が主であった。その過程で、昭和初期、太平洋戦争当時の資料による「戦争と大学」というテーマでの開催も検討してきた。しかし、医学部史料室には、一九四五（昭和二〇）年三月の三度にわたる空襲による鶴舞キャンパスの被害状況などに関連する資料は常時展示してあったが、当時の学生生活、研究、医療に関する資料など、展示会に広がりをもたらす資料はまだ十分ではないと考えていた。

（二）スクラップブックから始まる「戦争と大学」

医学部史料室には、展示ケースのほかに保存用の戸棚がある。大学史に関する資料を保管してある戸棚のひとつに、一冊の古びたスクラップブックがあった。名前も年月の記入も無いが、そのスクラップブックには、『昭和七年度學生部會決算報告書』、『名古屋醫科大學鶴天學友會學生部會總則』（昭和八年）、『昭和八年度役員一覧表』から、『昭和拾壱年度名古屋医科大学々友会学生部会豫算案』、『聲明書』（名古屋醫科大學　大庭教授留任運動學生實行委員會　昭和十一年）まで、当時の学生生活、特に学友会学生部会の活動を伝える貴重な資料が貼りつけられていた。本学の前身校の一つである官立名古屋医科大学の学生が遺したものである。このスクラップブックの「発見」が、ミニ展示会「大学と戦争」開催のきっかけと言ってよいものである。

「大学と戦争」で展示した、ポスター『醫學講演會と標本展覧會』（一九三四年）、愛國報國機「大學高専號」献納會『献

納據金締切延期ノ件』（一九三四年）、ポスター『第二回綜合文化講演會』（一九三六年）などは、このスクラップブックからの資料である。準備段階で、医学部史料室に寄贈された資料と、古書店から購入した資料の中から、展示品に加えていった。寄贈資料には、名古屋医科大学『第五學期時間表』（一九三八年）、名古屋醫科大學配屬將校『國家總動員法』（一九三九年頃）、『名古屋帝國大學學生證』（一九三九年）があり、購入資料には、『報國會會報創刊号（一九四一年）～第二号（一九四二年）』、渋沢元治『我等の學園』（一九四三年）があった。

さらに、展示会のひと月ほど前には、旧知の愛知大学法学部の大川四郎教授から、昭和十八年九月に本学医学部を卒業し、海軍軍医中尉として戦艦大和に乗り組み、ア号作戦、レイテ作戦などに参加した祖父江逸郎名古屋大学名誉教授に関する情報が寄せられた。また、祖父江名誉教授からは、著書『軍医が見た戦艦大和：一期一会の奇跡』の寄贈があった。

（三）展示内容とその特徴

展示した資料やパネルの個別の内容については、後掲の一覧表をご参照いただきたい。

本学の前身校である県立愛知医科大学は、一九三一（昭和六）年に官立移管により名古屋医科大学となり、一九三九（昭和一四）年には名古屋帝国大学医学部となった。官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学の時代は、一九三一年の満州事変から、日中戦争、太平洋戦争を経て、一九四五年の敗戦までの時代と重なる。そこで、展示会のタイトルを「戦争と大学―一九三一～一九四五　官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学―」として、二〇一四年二月一二日（水）から五月三〇日（金）までの期間、第六回目のミニ展示会として開催することとした。

医学部分館のミニ展示会では、通常、展示ケース二台と掲示板二台により展示を行うため、複雑な構成は考えな

いことととしている。「戦争と大学」でも、①当時の学生生活に関わる資料を中心として、②医科大学から総合大学を目指した当時の資料、③一九四五年三月のいわゆる名古屋大空襲に関わる資料、④戦争が大学・附属病院、研究にもたらした影響に関わる資料という観点から展示品を選定した。

①の資料は、ポスター『醫學講演會と標本展覽會』（一九三四年）、『名古屋醫科大學運動會プログラム』（一九三四年）、愛國報國機「大學高専號」献納會『献納據金締切延期ノ件』（一九三四年）、ポスター『第二回綜合文化講演會』（一九三六年）、名古屋医科大学『第五學期時間表』（一九三八年）、『名古屋帝國大學　學生證』（一九三九年）、渋沢元治『我等の學園』（一九四三年）、『大学生活（昭和一五～一八年）を顧みる：十八会五十周年記念誌』（一九九三年）、また、卒業アルバムとして、『卒業記念　名古屋醫科大學』（一九三四年）、『名古屋醫科大學第六期卒業生アルバム』（一九三七年）、『名古屋医科大学　第八回卒業記念』（一九三九年　皇紀二五九九年）から、軍事教練、軍事施設見学、陸軍病院慰問、勤労奉仕、松茸狩りなどの写真を展示した。

ポスター二点は、学生部会主催の講演会であるが、一九三四年の建物と木とのデザインから、二年後には、「日支問題の過去と現在」など文字だけの、緊迫した時局を反映したポスターへと変わっていった。

②の資料は、『綜合大學設置ニ關スル縣會意見書』（一九三七年）と、名古屋帝国大学開学記念式典一九四三年の記念品である、向かい合う鯱が描かれた蓋のある印鑑入れを展示した。

③の資料は、名古屋帝國大學醫學部附属醫院『病院防空』（一九四三年）、写真『空襲で灰塵に帰した鶴舞キャンパス』（一九四五年）、『空襲被害箇所要図』（一九四五年）、空襲により被災した図書（一九四五年）、勝沼精蔵、山元昌之『病院防空―戦跡と戦訓―』（一九四五年）、名古屋帝国大學医學部附属医院救護病院救護班『空襲ニ因ル外傷患者ノ治療成績：昭和二〇年三月一九日以降終戦まで』（一九四五年）である。

④の資料は、名古屋醫科大學配屬將校『國家總動員法』（一九三九年頃）、『報國會會報創刊号（一九四一年）～第二号（一九四二年）』、『汪兆銘氏の入院』（一九四四年）、『Lesen, Denken und Arbeiten：祖父江逸郎教授退官記念』（一九八四年）、祖父江逸郎『軍医が見た戦艦大和』（二〇一三年）、パネル『齋藤眞先生：名古屋大学医学部の大先輩の足跡』（二〇〇九年）である。『名大醫學部學友會報』第五八～六〇号（一九四〇年）第一～三五号（一九四六年～一九五一年）と、渋沢元治『五十年間の回顧』（一九五三年）はハンズオン資料とした。

名古屋帝国大学の渋沢元治初代総長『我等の学園』と『五十年間の回顧』からは、学生寮での総長と学生との豚鍋をつつき合う懇談会の様子や、軍部からの要求に対して、大学は学術を以って時局に応じる教育をなす使命を持っている、と答えるなど渋沢総長の考え方を随所に読み取ることができる。

なお、展示品の説明カードは資料の画像とキャプションとで構成し、インターネットで公開している「近代医学の黎明デジタルアーカイブ」[4]のメタデータと共通の記述としている。

（四）展示会の反響

展示会開催の一週間前に、毎日新聞社中部本社から事前取材があり、開催前日の朝刊に記事が掲載された[5]。展示会開催後は、受験生のための名古屋大学発見サイトCheers!のスタッフである本学文学部三年生[6]、中日新聞ショッパー[7]、朝日新聞社名古屋本社[8]、ＮＨＫ名古屋放送局[9]から取材が相次いだ。

見学者からは、「附属病院の防空壕で赤ちゃんが生まれたと聞いている」という情報が寄せられた。

また、報道機関、特にＮＨＫ名古屋放送局によるテレビ放映とその反響の大きさにより、開催期間を次のミニ展示会直前まで延長し、六月七日（土）まで開催した。さらに医学部分館での開催後、本学大学文書資料室との共催

により、大学本部のある東山キャンパスの附属図書館中央図書館を会場として、大学文書資料室所蔵資料による増強を行った拡大版「戦争と大学」を開催できたことは、大きな収穫であった。

二　東山における企画展「戦争と大学」

（一）開催決定までの経緯

一で解説されている、鶴舞における展示会については、大学文書資料室（以下、本室）は全く関係していなかった。それが、東山での企画展の共催に至ったきっかけは、第二次世界大戦期において名古屋帝国大学やそこに属する研究者たちが携わった、戦争遂行に役立てるための性格を色濃く持つ研究、いわゆる「戦時研究」について、ＮＨＫ名古屋放送局（以下、ＮＨＫ）からの取材を受けたことである。

二〇一四年五月九日、ＮＨＫのディレクターが本室へ取材に来室した。この段階では、まだこのテーマでの取材を始めたばかりで、放送が決まっている番組を作るためのものではなく、将来のための情報収集といったところのようであった。筆者が名古屋帝国大学の戦時研究について明らかになっていることを説明し、本室所蔵の関係資料を実際に提示すると、これに触発されＮＨＫが独自に取材を進め、にわかにこれをテーマする番組を制作する方向に進んでいった。筆者も、本学のことはもとより、日本全体の戦時研究の研究状況についての情報提供などをおこなうなどして協力した。

そして早くも五月二六日の夕方には、「ほっとイブニング」（ＮＨＫ総合、午後六時一〇分〜午後七時、東海三県

を中心に放送）の中で、「明らかになる戦時下の名大」と題した八分ほどの特集が放送された。そこでは、名古屋大学における鶴舞の展示会の模様、大学文書資料室所蔵の戦時研究に関する史料、戦時中は航空医学研究所として設置されていた現在の環境医学研究所の研究、戦時中の本学医学部卒業生で戦艦大和に軍医として乗り込んだ祖父江逸郎名誉教授のことなどが取り上げられ、本稿の両筆者である蒲生英博特任専門員と堀田慎一郎特任助教も解説役として出演した。また翌二七日の朝には、この特集の短縮バージョンが、「おはよう東海」（ＮＨＫ総合、午前七時四五分～午前八時、東海三県を中心に放送）の中でも放送された。

その後、この放送を視聴した本室の鮎京正訓室長（理事・副総長）から筆者に対し、鶴舞での展示会を東山でも開催できるとよい、との連絡があった。筆者も、来年は戦後七〇年ということもあり、戦争に関する企画を考える必要があるかもしれないと考えてはいた。室長はすぐにと言ったつもりはなかったかもしれないが、一年早いものの、こういった反響が残っているうちに企画展をおこなうことも、一つのやり方ではないかと考えるようになった。

ただ、鶴舞でのミニ展示会は、医学部およびその前身学校を中心とする内容であった。東山キャンパスでおこなうのであれば、名帝大全体の内容を拡充し、医学部以外の学部等、そして何より東山キャンパスについても十分に触れなければふさわしくない。しかも、戦争をテーマにするのであれば、やはり八月一五日を会期に入れることが望ましいだろう。そうなると展示の準備期間はかなり限られてくる。また展示会場も問題であった。もちろんこのスケジュールでは、これまでのように博物館の展示室は使うことができない。

筆者は、六月二四日におこなわれた本室の室会議において、これらの条件でも開催可能な企画展の構成案を示し、室長の承認を得たうえで、展示の準備作業にとりかかった。

（二）準備作業の概略

展示の構成およびその他実務的な準備作業は、蒲生英博特任専門員をはじめとする附属図書館医学部分館の全面的な協力を得つつ、筆者（堀田）が担当した。

会場は、中央図書館二階のビブリオサロンを使用した。このビブリオサロンは、二〇一四年四月にリニューアルオープンした中央図書館の全面改修工事にともなって、正面玄関から入り、受付ゲート前の左手奥に新設された部屋である。本学の教職員・学生による学習・研究・授業、あるいはそれに資する展示会や発表会等に利用されることが想定され、特別な利用がない時間は若干の机や椅子が置かれたフリースペースとなっている。約一三m×七・五m（室内有効寸法約一一・五m×五m）と、それほど広いとはいえないが、全面改修工事前までは中央図書館四階にあった展示室の機能を移転することも重視されているため、多くのガラス展示ケースをはじめ、展示パネル用フック、ショウウインドウ式の展示空間もあるなど、設備は充実している。オープンして間もないことが幸いし、直前の申し込みにもかかわらず、八月一五日を含めた一ヵ月間の利用が認められた。鶴舞での展示会は、展示スペースの関係で、せっかくの資料を狭い空間に詰め込むことを余儀なくされていたが、これだけの会場であれば、名帝大全体や東山キャンパス関係の資料を加えても余裕をもって展示することができる。

さて、準備作業を進めるにあたって問題になったのは、準備期間の短さである。しかもちょうどこの頃、『歴代総長と名大史―名古屋大学七五年の軌跡―』[10]の編集作業とも重なっていたため、余計にスケジュールが逼迫していた。この状況では、関係者に広く呼びかけて新しい展示資料を発掘することは難しく、以前から本室が所蔵している資料を展示するしかなかった。また時間的な理由とともに、年度計画にはなかった企画展のため、予算がほとんど使えないこともあって、展示パネルはこれまでの企画展等で製作したものを中心にせざるをえなかった。ただ、

附属図書館医学部分館所蔵の展示資料については、すでに先の鶴舞の展示会で重要なものが提示され、さらにキャプション等もできているので、展示の構成さえ定めれば、あとはキャプションプレートの統一をはかればよい。[11]

もう一つの課題としては、観覧者の呼び水になるような、一点だけで大きな話題となるような、目玉となる展示物である。確かに、鶴舞の展示会の資料も本室所蔵の資料も、歴史資料としては大変重要なものばかりであるが、文書や写真が中心ということもあり、インパクトという意味では難しいものがあった。もちろん、東山での企画展のきかっけになった戦時研究に関する資料も、ＮＨＫの番組で取り上げられたものを含めて、積極的に展示することにしたが、これも文書資料ばかりである。

鶴舞の展示会の資料の中で、最も迫力があったのは、空襲によって焼けこげた、当時の鶴舞の医学部にあった図書であった。しかしこれは、劣化が進み大変もろくなっており、鶴舞であれば何とか展示もできようが、東山に運ぶことはやや無理があると判断、非常に残念であったが現物は断念し、写真を拡大して展示するにとどめざるを得なかった。

そのほか、次項でも触れるように、当時の柴田雄次理学部長直筆の日記は、実物は初公開ということもあり、個人的には大変なインパクトがあると考えたが、果たしてどこまで観覧者等の興味を引くことができるかどうかは未知数であった。

そのようななか、全く偶然であるが、準備作業を進めていた筆者のところに、一本の電話があった。詳しくは次項で述べるが、戦時中に名帝大に入院して死去した汪兆銘の関係者の資料を見つけたという話題提供であった。これも、関係者自ら作成した資料とはいえ、ワープロからのプリントアウトであるし、しかも展示するのはさらにそのコピーである。しかしこれは、教科書にも必ず出てくる汪兆銘に関するものであると同時に、何より国民栄誉賞

を受賞し、つい二年足らず前まで存命であった国民的俳優の森光子さんに関する、しかも謎めいた背景をも持っている内容であった。筆者は、最も目立つショウウインドウ式の展示スペースに、あえてこの資料と関連資料を置くことにした。

宣伝としては、附属図書館医学部分館の協力を得ながら、ポスターを学内には広く配布したが、時間的な制約もあって、学外には十分に普及することができなかった。ただ、鮎京室長が大学執行部にはたらきかけ、濵口道成総長の意向もあって、展示開始直後に報道関係者を集めての説明会を開くことができた。また、総長を含めた役員等による内覧会も開催した。

展示の設営作業は、中央図書館の協力を得ながら、筆者をはじめとする本室のスタッフがおこなった。幸い、会期の直前に特別な利用がなかったので、四日間をビブリオサロンに一般利用者は立ち入り禁止にして、比較的じっくりと設営に充てることができた。

(三) 展示内容とその特徴

展示した資料の内容については、後掲の一覧表と写真をご参照いただきたい。なお、鶴舞の展示会で展示された資料の全てをこの企画展でも展示したわけではなく、全体のバランスを考えて外したものある。パネルは、入口のあいさつパネル以外は、すでに過去の企画展で用いて展示記録にも掲載したものや、名古屋大学の広報誌や本室ホームページで公表済みのものなので、具体的な内容の本展示記録への掲載は割愛した。[22]

全体の構成は、「一　満州事変後の名古屋医科大学」、「二　名古屋帝国大学の誕生」、「三　戦争と名古屋帝国大学」、「四　空襲と名古屋帝国大学」、「五　敗戦と名古屋帝国大学」という五コーナー構成とした。鶴舞の展示会で

も、狭い展示スペースの制約の中で、テーマ別に資料が並べられていた。ただ、名帝大全体に関わる資料も若干展示されていたものの、展示の趣旨から言えば当然のことながら、医学部を視点の中心にすえていた。東山での企画展では、これらに本室が所蔵する資料を組み合わせて、医学部以外の学部や東山地区を含めたストーリーを描くことが必要だった。

まず、名古屋帝国大学医学部の前身となった名古屋医科大学については、第一コーナーにまとめることにした。医学部という視点では、名古屋医科大学と名帝大医学部の連続性はきわめて高いが、それ以外の学部を含めた名帝大全体という観点からすれば、やはり分けた方が理解しやすいのではないかと判断した。また、名古屋医科大学時代は、この企画展が対象とする期間の約三分の二を占めるものの、本格的な戦時体制としては一九三七年七月七日の盧溝橋事件以降の二年足らずであり、大学と戦争の直接的な関係を示す資料は少ないからである。そして、名古屋帝国大学がまさに戦時体制下に誕生した大学であることを強調するために、小規模ながら第二コーナーとして独立させた。そして名帝大と戦争との関わりについては、時代的に一九四五年の短期間に集中している空襲に関することは第四コーナーとして独立させ、その他の事項は第三コーナーに入れた。そして、鶴舞の展示会では、敗戦後の事項については展示されていなかったが、一九四五年のものであれば、企画展の題目の中の「一九三一～一九四五」にも反しないと考え、第五コーナーを設けた。

また、鶴舞の展示会では、名古屋医科大学と名帝大医学部を中心とする詳しい年表が展示されていたが、東山の企画展ではその代わりに、二〇一一年に本室と名古屋大学博物館が共催した、第一九回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念―」における第三コーナー「創立―名帝大けふ誕生―」の展示パネルを活用した。

第一コーナー「満州事変後の名古屋医科大学」は、コーナー名の通り、一九三一年九月一八日の満州事変後から、一九三九年四月一日に名古屋帝国大学が設置されるまでの、名古屋医科大学と戦争との関連を示す資料を展示した。そのほとんどは、鶴舞の展示会で展示されたものである。詳しくは、本稿一の解説をご覧いただきたい。

第二コーナー「名古屋帝国大学の誕生」は、名古屋帝国大学の創立に即した資料を集めた。これについては、本室の所蔵資料や製作パネルにも定番のものがそろっていたが、これに開学記念式典の記念品と学生証などの鶴舞の展示会での展示資料を加えることによって、視覚的にもより充実した内容となった。

第三コーナー「戦争と名古屋帝国大学」は、大きく三つのエリアに分けた。

一つめのエリアは、展示ケースで言うと3―1から3―3まで、パネルでは4から8までにあたる。ここでは、名古屋帝国大学の学生生活を中心に、残り二つのエリア以外の事項を全般的に集めた。本室所蔵の資料から展示物を選ぶにあたっては、できるだけ鶴舞での展示で展示された資料に関連したものを選ぶようにした。

二つめのエリアは、ショウウインドウになっている展示スペースである。ここには、名帝大医学部附属医院に極秘に入院して手術を受けたが、すでに手遅れになっており、その後同医院で死亡した汪兆銘に関する資料を集めた。ここでは、前項でも少し触れた、展示の準備作業中に情報を得た、汪兆銘の死亡した日に医学部附属医院に当直医として勤務していた田ノ井貞治氏（故人）の手記を中心とする展示構成にした。この資料は、情報提供者の西田勝氏が、田ノ井氏の残した資料の中から発見したものである。戦争とは関係のない、田ノ井氏のライフワークである考古学関係の資料を整理していて偶然見つかったものであった。見つかった資料はパソコンからのプリントアウトであるが、そのデータの入ったパソコンは田ノ井氏のご子息である田ノ井千春氏が所蔵しているということで、千春氏に相談したところ、プリントアウトの展示をご快諾いただいた。もっとも、田ノ井貞治氏は関係者といっても、

汪兆銘の医療団のメンバーではない。この資料の話題性は、やはり国民的俳優である森光子さんとの関係によるので、それを示す資料（『文藝春秋』掲載の森さんの手記）も合わせて展示した。さらに、鶴舞の展示会での展示資料および本室製作のパネルによって、名帝大と汪兆銘の関わりの一般的事項について補足した。

三つめのエリアは、展示ケース3―4である。ここには、名帝大の戦時研究、戦争への科学技術動員に関する資料を集めた。戦時研究の問題は、これがＮＨＫの番組取り上げられたことが、東山での企画展を開催するきっかけとなったものであった。実際にはまだ明らかになっていないことが多いものの、やはり取り上げないわけにはいかないと考えた。展示資料の選定や説明文の作成にあたっては、ＮＨＫの取材を受けた際、関連事項を調べたことが役に立った。ただ、ここは文書資料ばかりで、展示としては単調になっている。

第四コーナー「空襲と名古屋帝国大学」では、鶴舞への空襲に関する資料については、鶴舞での展示でも多く展示され、内容も豊富であったが、対象的に東山への空襲に関する資料が少ないことに苦労した。

そこで、当時の理学部長であった柴田雄次の日記を展示することを考えた。柴田雄次は、東京帝国大学教授、名古屋帝国大学教授、東京都立大学初代総長、日本学士院長等を歴任し、日本学士院恩賜賞、文化功労者選出をうけた、きわめて著名な化学者であるが、長期間にわたる克明な日記を残している。そのごく一部については、所蔵者の柴田純子氏編集による非売品の私家版冊子があるが[13]、ほとんどは未公開・未公刊である。ただ二〇一二年に、ご遺族の一人で名古屋大学大学院環境学研究科准教授の上村泰裕氏を通じて、本室が名古屋帝国大学および名古屋大学在官時代の日記を撮影し、マイクロフィルム化・デジタル化することができた[14]。その関係で、柴田純子氏に相談したところ、直前になっての申し出にもかかわらず、日記の現物の貸与をご快諾いただけたことは誠に幸いであった。東山への空襲当日の日記を展示できたことにより、東山への空襲当日の生々しい状況が明らかになった[15]。

第五コーナー「敗戦と名古屋大学」では、敗戦の影響ということなら、もっと後の時期まで含めればいろいろな資料はあるが、それではこの企画展の趣旨から考えると間延びした印象になってしまうので、敗戦後といっても一九四五年までの資料にあえて限定した。三点とも名古屋帝国大学の公文書ファイルで、内容は興味深いものと自負しているが展示としてはやや単調である。ただ、公文書管理法における「特定歴史公文書等」の利用の促進という意味合いも込めて展示した。[16]

むすびにかえて

本企画展に対する報道機関の反応は、鶴舞、東山ともにきわめて大きなものがあった。鶴舞での展示会については、一の（四）及び二の（一）をご参照いただきたい。また、入場者については、人数のカウントはしていないものの、附属図書館医学部分館に来館する人は必ずこの展示の前を通ることを考えると、程度の差こそあれ、かなりの人がこの展示を目にしたことと思われる。

東山での企画展については、まず会期初日の八月一日に報道機関への説明会を開催したところ、新聞・通信社四社（読売新聞、朝日新聞、中日新聞、共同通信）、テレビ局二社（ＮＨＫ名古屋放送局、東海テレビ）が取材に詰めかけた。最初に蒲生英博特任専門員と堀田慎一郎特任助教が一通りの説明をしたのち、個別の取材を受けた。報道関係者の強い関心を集めたのは、初公開の二つの資料、すなわち汪兆銘や森光子に関する田ノ井貞治氏の手記と、東山への空襲に関する柴田雄次の日記であった。これは狙い通りであったと言える。とりわけ前者への取材が多かっ

た。

取材に来た新聞社・テレビ局等が、この企画展について報道した。[17] とくに中日新聞と朝日新聞は、かなり多くの誌面を割いて記事を掲載した（当該新聞記事を後掲）。中日新聞などは、朝刊の一面に掲載するほどであった。田ノ井手記に関する報道機関の反響は、筆者（堀田）の予想をはるかに上回るものであった。もっとも、こうした大きな報道は、今回の企画展そのものではなく、森光子さんのエピソードに焦点を置いたものであった。また、名帝大附属医院における汪兆銘の治療に深く関わった人物のご遺族が東山の企画展を観覧し、その方がお持ちの貴重な資料の存在が明らかになるという一幕もあった。

東山の企画展への入場者数は、一ヵ月で一〇七九名であった。報道機関にあれだけ取り上げられたのであれば、もう少し多くてもよいようにも思われる。目玉となった田ノ井手記と柴田日記が、内容はきわめて重要であるものの、誰もが知っている著名な人物によるものではなく（柴田は科学史や大学史においては著名だが、一般の知名度が高いとはいえない）、この実物を見るために足を運びたいという欲求に結びつかなかったからであろうか。また、展示が決まってから開催までの期間がきわめて短く、関係機関への宣伝ができなかったことも大きいだろう。また、八月という展示期間が、学生が大学にあまり来ない時期にあたっていることも原因として考えられる。

それでも、こうした名大史に関する企画展の目的が、名古屋大学の沿革や学術の歴史を学内・学外にアピールすることであり、報道機関に大きく取り上げられたということを考えれば、少なくとも学外へのアピールという意味ではその目的はかなり達成されたといえよう。

Nagoya University Medical Museum
Small Exhibit 6th
ミニ展示会
戦争と大学
ー1931～1945 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学ー
第二回綜合文化講演會
2014 2. 12 WED - 5. 30 FRI
平日 9:00ー20:00 3月24日-3月31日は9:00ー17:00
土 13:00ー17:00
休館日: 日・祝日、3月22、29日
名古屋大学附属図書館医学部分館 2階入口ホール
入場無料
問合せ先. 名古屋大学附属図書館医学部分館
名古屋市昭和区鶴舞町65
TEL 052ー744ー2505

名古屋大学の前身校である県立愛知医科大学は、1931(昭和6)年に官立移管により名古屋医科大学となり、1939(昭和14)年には名古屋帝国大学医学部となりました。

官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学の時代は、1931年の満州事変から、日中戦争、太平洋戦争を経て、1945年の敗戦までの時代と重なります。

「戦争と大学 ミニ展示会」は、名古屋大学医学部史料室(附属図書館医学部分館4階)に所蔵する史料の中から、名古屋空襲により甚大な被害も受けた、この戦争の時代の官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学における研究・教育・医療について、史料、写真等により、展示公開します。

名古屋大学医学部史料室は、附属図書館医学部分館の4階にあります。

医学部史料室では、名古屋大学の源流である明治4年の名古屋県仮医学校設立前後の史料を中心とし、東海地方の医学の歴史的発展過程、さらに広く医学・医療史に関係する古医書、歴史的医療器具、古写真、絵画等を所蔵しています。

名古屋大学医学部史料室に所蔵している史料をデジタル化し、「近代医学の黎明デジタルアーカイブ」として、インターネットで公開しています。ぜひご覧ください。

近代医学の黎明デジタルアーカイブ
http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/

展示会「戦争と大学」（鶴舞）展示物一覧

写真	展示品名	説明文・備考
	ポスター『醫學講演會と標本展覽會』1934 年	名古屋医科大学の学生が自治団体として組織した学生部会は、昭和 9 年（1934 年）に、次のスケジュールにより大学祭を開催しました。 11 月 3 日（土）　鶴天学友会懇親会参加 11 月 4 日（日）　医学標本展覧会（学生ホール）、講演会（大学講堂） 11 月 10 日（土）　大学祭の夕　音楽と映画（市公会堂） 小宮喬介（1896–1951）は、日本法医学会会長をつとめ、鑑識科学、とくに指紋の研究で知られ、桐原眞一（1889–1949）は、「桐原式胃鏡」を開発し、胃がんの早期発見を実現し、大庭士郎（1884–1937）は、局所免疫、血液型、濾過性病原体の研究で知られています。
	名古屋醫科大學運動會プログラム　1934 年 大學祭記念醫學大講演會 1934 年 大學祭醫學標本展覽會 1934 年	名古屋医科大学の学生部会は、昭和 9 年（1934 年）11 月 4 日（日）に、医学講演会、標本展覧会、運動会を開催しました。 運動会のトミクヂ競争や武装競争、標本展覧会の出品物などに時代を感じさせます。
	愛國報國機「大學高專號」献納會『献納據金締切延期ノ件』1934 年	第二次世界大戦前、民間からの寄附金によって献納された陸軍航空機を愛国機といい、海軍航空機を報国機と呼びました。 昭和 9 年（1934 年）2 月 25 日、愛国報国機「大学高専号」献納会は、会長 鳩山一郎（はとやま　いちろう　1883–1959）文部大臣名で、学生代表委員宛てに、献金據金の締切延期、飛行機献納期日の変更、第二次献納據金の募集などを依頼しました。 機体に「大学高専号」と入れた九〇式艦上戦闘機三型は、同年 6 月 17 日に献納されました。

	卒業記念　名古屋醫科大學 1934 年	昭和 9 年（1934 年）3 月、88 名の学生が卒業しました。 野砲第三連隊見学、電信隊見学、衛生施設見学（名古屋市立屠殺場）、田中文相訓示（官立移管祝賀式）、愛知医科大学最後の記念祭、査閲（八事本学グラウンド）、松茸狩（栗栖山）、解剖祭追悼会（覚王山日泰寺）などの写真が掲載されています。 この年、満州国で愛新覚羅 溥儀が皇帝となりました。
 第二回綜合文化講演會 一 鳥と飛行機 一 醫學の文化的特質 一 日支問題に通ずる現在 杉田直樹氏 米田實氏 入場無料 日時 十月廿日午後從午前 場所 名古屋醫科大學講堂 主催 名古屋醫科大學生部 大阪朝日新聞名古屋支社	ポスター『第二回綜合文化講演會』1936 年	「私達の純真にして真剣なる名古屋文化向上運動たる綜合文化講演会を開催することになりました。（中略）私達は名古屋の地に育つ学術、芸術、宗教、哲学を深く理解すると同時に更にこれを発展進歩せしめ、これを最高水準に迄到着せしめる様に育て上げなければなりません。」（名古屋医科大学学生部会による御案内より） 野田哲夫は、ドイツに留学し日本人として初めて航空力学を学び、軍の要請を受けて軍用機の開発を始めた三菱航空機で技師となりました。杉田直樹（すぎた　なおき　1887-1949）は、精神医学者、米田実（まいだ　みのる　1878-1948）は、新聞記者、外交史家です。
 綜合大學設置ニ關スル縣會意見書	『綜合大學設置ニ關スル縣會意見書』1937 年	大正 7 年（1918 年）12 月 6 日、官学以外に公・私立大学を認め、その目的・組織および監督を規定した大学令が公布されました。同月、愛知県通常県会において、綜合大学設置に関する建議が政友会等から提出され、可決されました。 愛知県立医学専門学校（1903-1920）は、大学令に基づき、大正 9 年に県立愛知医科大学（1920-1931）となり、昭和 6 年には国に移管されて官立名古屋医科大学（1931-1939）となりました。 昭和 12 年 12 月 14 日、愛知県会で、綜合大学建設方に関する件が満場一致で可決されました。文化の高揚、産業の開発に寄与する多数平和の戦士および満州、支那において活躍するための人材の養成の必要性が訴えられています。

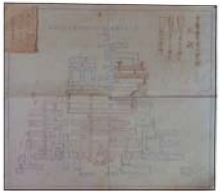
	名古屋醫科大學第六期卒業生アルバム　1937 年	昭和 12 年（1937 年）3 月、65 名の学生が卒業しました。 名古屋医科大学第六期生が在学していた昭和 8 年–12 年には、二・二六事件が起こり、軍部が発言力を強化していった時代でした。 昭和 12 年 7 月 7 日に、盧溝橋事件が起こり、これが発端となり日本と中華民国間に、全面的な日中戦争が始まりました。
	第五學期時間表　1938 年	昭和 13 年（1938 年）9 月～ 12 月の名古屋医科大学 第五学期時間表です。1 年を分けて 3 つの学期とするため、第五学期とは 2 年生の第 2 学期のことです。4 年生までで、各年の第 1 学期は 4 月 1 日～ 9 月 10 日、第 2 学期は 9 月 11 日～ 12 月 31 日、第 3 学期は 1 月 1 日～ 3 月 31 日です。 「教練」の担当は、配属将校の森脇予備役大佐です。 大島福造、鶴見三三、宇佐見鍵一、三輪誠、齋藤眞、桐原眞一、木村哲二、小笠原一夫、石川顕正、戸田博の名前があります。 裏面には、共済部指定商人とし、洋服店、時計店、靴店等の案内が書かれています。
	名古屋醫科大學配屬將校『國家總動員法』1939 年頃	国家総動員法は、昭和 13 年（1938 年）4 月公布、5 月施行された法律です。 日中戦争に際し、国防目的達成のため、国内の人的、物的資源を統制、運用することを目的とし、労務、資金、物資、物価、企業、運輸、貿易などについて統制の権限を政府に与えたものです。これに基づき、国民徴用令、国民職業能力申告令、価格等統制令、生活必需物資統制令、新聞紙等掲載制限令その他の統制法規が作られ、昭和 16 年 3 月大幅な改正が行われて罰則なども強化されました。太平洋戦争に突入すると、その適用は拡大されて、国民生活を全面的に拘束しました。昭和 21 年 4 月 1 日に廃止されました。 この冊子は、名古屋医科大学配属将校から配付されたものです。

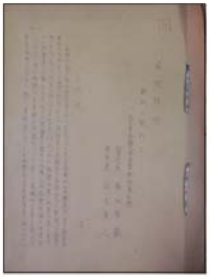
	名古屋医科大学　第八回卒業記念　1939 年（皇紀 2599 年）	表紙に“Erinnerung an unser Studentenzeit”（私たちの学生時代の記憶）と 2599（皇紀）、タイトルページに 2599 とあります。皇紀（神武天皇即位紀元）は、日本書紀の記述により、初代天皇である神武天皇が即位したとされる年を元年とする日本の紀年法です。 部活動（射撃部、柔剣道部、馬術部など）勤労奉仕、陸軍病院慰問などの写真が掲載されています。 この年、厚生省は「結婚十訓」を発表し、「産めよ殖やせよ国のため」の標語を掲げました。
	名古屋帝國大學　學生證 1939 年	修学簿（成績表）が綴じ込まれています。 最初に、次のような注意事項が書かれています。 一、学生証ハ登学ノ際必ラス携帯スヘシ 一、学生証ヲ以テ本学附属図書館閲覧票ニ充ツ 一、学生証再交付ヲ求ムル場合ハ手数料金一円ヲ納ムヘシ 修学簿は、学科目ごとに、学修期間、学修承認、学修証明、合格証明の欄があり、授業開始 1 週間以内に各担任教官に申請しその承認を請い、学士試験に合格した学科目に対して事務室で合格証明を与えられました。
	『名大醫學部學友會報』第 58–60 号（1940 年）；第 1–35 号（1946 年–1951 年）	明治 33 年（1900 年）10 月 28 日に発足した愛知医学校同窓会の会報『愛知醫學校同窓會雜誌』は、誌名の変遷を重ねました。 昭和 8 年（1933 年）からは、講師・助手等の教官を編集者とする『鶴天学友会報』（第 1–12 号　昭和 8 年 7 月–10 年 7 月）と、自治への希望が強くなった学生部会が主体で発行する『名大』（第 1–23 号 昭和 8 年 1 月–10 年 4 月）の併行発行の時期を経て、昭和 10 年より『名大学友会報』として統一され、その後、『名帝大医学部学友会報』、『名大醫學部學友會報』へと変遷しました。 『名大醫學部學友會報』は昭和 15 年 60 号をもって、一時休刊となり、昭和 21 年 11 月に復刊されました。

	報國會會報　創刊号（1941年）−第2号（1942年）	昭和15年（1940年）10月の帝国大学総長会議などにおいて、学友会を改組し、報国団を結成するよう求める文相訓示が行われました。名古屋帝国大学（1939−1947）では、15年7月に結成されていた体育会が翌年5月1日に解散となり、代わって同日に報国会が結成されました。会長は、渋沢元治（しぶさわ　もとじ　1876−1975）名古屋帝国大学初代総長です。 太平洋戦争開戦後の17年12月には、渋沢報国隊長から、東春日井郡牛山にて、工兵基礎作業訓練を受け、航空機滑走路整備作業に従事するため、報国隊を出動したいとする通知書が関係者宛てに出されました。そして、19年8月公布の学徒勤労令により、学校報国隊による「勤労即教育」の学徒動員が法制化されました。
	渋沢元治『我等の學園』1943年	渋沢元治（しぶさわ　もとじ　1876−1975）は、名古屋帝国大学の初代総長（1939−1946）です。 昭和17年（1942年）、工場労働者の増加と戦時下により、学生の下宿が不足したため、大学で空き家を借り入れ、学生寮として十数名の学生を入寮させました。 この寮は、渋沢総長により「菁々寮（せいせいりょう）」と名づけられ、総長直筆の書（「進吾往也」、「園日渉以成趣」）が掲げられました。「菁々寮」内では、総長と学生との、豚鍋をつつき合う懇談会が開催されました。学生により総長懇談会と名づけられ、7月まで十数回開かれ、のべ二百名あまりの学生が参加しました。翌18年からは、本部会議室で開催されるようになり、その内容を書いた『我等の学園』を学生に配付し、懇談会で説明、補足を行いました。

	名古屋帝國大學醫學部附属醫院『病院防空』1943 年	名古屋師団の小越前防衛主任参謀等の指導を得て、また田村春吉医学部長、勝沼精蔵医院長、三輪誠図書館長の教示を仰いで、附属医院事務長の山元昌之がまとめ、昭和 18 年 4 月 24 日に［部外秘］として発行しました。 昭和 20 年 2 月、渋沢総長は空襲に対する処置をまとめました。「①医学教育の中枢ともいうべき附属医院は空襲下名古屋市民の尤も重要なる治療機関である。随ってこれは疎開することは不可能であった。②医学部も大別して基礎と臨床、また内科、外科、耳鼻科、眼科等の諸学科に分かれて居るが、これ等を別々に隔たった場所に置いては教育も研究も殆んど出来ない。そこで特殊の戦時研究施設と応急治療上必要なる薬品、器具等を比較的安全の場所に移す程度の疎開を行うこととした。」
	名古屋帝国大学　昭和 18 年卒業アルバム　1943 年	昭和 18 年に卒業した学生は、十八会という級会名を持ち 76 名の会員がいます。 高師ヵ原（たかしがはら）練兵場は、豊橋南部にあった陸軍演習場です。 この年の 2 月、陸軍省は、「撃ちてし止まむ」というポスターを配布し、4 月、海軍大将の山本五十六は、ソロモン諸島上空で戦死しました。
	名古屋帝国大学開学記念式典記念品　1943 年	昭和 14 年（1939 年）4 月 1 日、帝国大学令及び名古屋帝国大学官制に基づいて名古屋帝国大学が創設され、名古屋医科大学は同帝大医学部に改組されました。昭和 15 年 5 月 1 日に創立記念式を行い、その後、17 年に医・工・理の 3 学部が揃い、医学部学友会の寄附があったことで、18 年 5 月 1 日に東山地区で開学式が開催され、続いて 2 日、3 日には鶴舞地区で沿革史展や講演会、映画会などが催されました。記念品の蓋の表には、向かい合う鯱が描かれ、裏には「名古屋帝国大学開学記念」と刻印されています。この記念品は、瀬戸市出身で、愛知県立医学専門学校を卒業した医師であり、後に政治家として衆議院議長となる加藤鐐五郎（かとう　りょうごろう　1883–1970）の遺品です。

	汪 兆銘氏の入院　1944 年	汪兆銘（おう　ちょうめい　1883-1944）は、中国広東省生まれの政治家です。清朝末期に日本へ留学し法政大学を卒業しています。孫文の中国革命同盟会のメンバーで、国民党左派の重鎮でした。孫文の死後は国民政府主席として、日中戦争後は親日派として、抗日派の蔣介石と対立しました。 昭和 19 年（1944 年）3 月に来日し、名古屋帝国大学附属病院で、以前に受けた凶弾の摘出再手術を受けました。このことは暗号「梅号」と呼ばれて一般には公表されませんでした。しかし、彼の病気は多発性骨髄腫であったため、治療の甲斐もなく同年 11 月に附属病院内で死亡しました。汪兆銘の死後、治療に対する感謝として遺族から梅の木が贈られ、「汪兆銘の梅」として、現在は大幸キャンパス内にあります。
	写真『空襲で灰塵に帰した鶴舞キャンパス』(中央に焼残った建物は旧図書館）　1945 年	昭和 20 年（1945 年）3 月 12 日の空襲で、医学部及び附属医院の木造建物は大部分を焼失し、3 月 19 日の再度の空襲により病院の建物 4 棟を失い、3 月 25 日の 3 度目の空襲では残存建物のガラス窓に大被害を受け、戦前の建物の 62％以上を焼失しました。図書館は鉄筋コンクリート造りであったため、焼失を免れました。『五十年間の回顧』によると、「本学内においては殆ど死傷者は無かった」ということです。 教室を焼失した診療各科並びに基礎教室の一部は外来診療所に、また基礎医学教室の大部分は、市内千種区城山町の昭和塾堂や血清製造所を愛知県から借り受けて分散し、かろうじて教育、研究を続行しました。

	空襲被害箇所要図　1945 年	昭和 17 年（1942 年）4 月、名古屋に初の空襲がありました。昭和 19 年 12 月以降、名古屋には軍需工業が集中していたため合計 63 回の空襲を受けました。 昭和 20 年 3 月 12 日の空襲では、医学部及び附属医院の木造建物の大部分を焼失、3 月 19 日の再度の空襲により病院建物 4 棟を失い、3 月 25 日の 3 度目の空襲では残存建物のガラス窓に大被害を受け、戦前の建物の 63％余りを焼失しました。 これは、3 月 12 日（図面では 13 日）と 19 日の被害箇所を描いた図面です。
	空襲により被災した 図書　1945 年	昭和 20 年（1945 年）3 月、3 度にわたる空襲によって鶴舞キャンパスの医学部、病院は建物の 62％以上を焼失しました。基礎教室と附属医院との中央に位置していた図書館は、鉄筋コンクリート造りあったため、蔵書はほとんど無事でしたが、各教室に置かれていた図書は大半が焼失しました。 同年 8 月 10 日前後に、図書館は製本雑誌を主体に約 2 万冊を岐阜県大野郡清見村の神社社務所へ疎開させました。当時の図書館は、1 階が広間兼新聞閲覧室、学生閲覧室、雑誌閲覧室など、2 階は教授閲覧室、事務室、書庫、3 階は講堂、奉安室（天皇と皇后の御真影と教育勅語を納めていた部屋）で、敷地は 116.16 坪（384m^2）、延べ床面積は 451 坪でした。

	勝沼精蔵、山元昌之『病院防空　―戦跡と戦訓―』1945年	名古屋帝国大学医学部附属医院の勝沼精蔵（かつぬま　せいぞう）医院長と山元昌之（やまもと　まさゆき）事務長が、昭和20年（1945年）4月3日に［秘］として発行しました。内容は次のとおりです。 Ⅰ．総説：病院防空は一般防空業務の外に、病院のみの有する特異性に支配される。 Ⅱ．戦跡：3月12日、19日、25日の3回にわたる空襲時の職員数、入院患者数等と、詳細な記録。 Ⅲ．戦訓：一般的な問題（水不足、防護当直員の相当数確保、物品疎開の早急・徹底的実施、食糧配給手配、鉱石ラジオ・自転車・木炭自動車の確保）、病院独特の問題（患者避難、医師・看護婦の一般防空業務担当後の傷者治療体制、収容患者の後送と食餌状況）
	名古屋帝国大學医學部附属医院　救護病院救護班 『空襲ニ因ル外傷患者ノ治療成績：昭和20年3月19日以降終戦まで』1945年	昭和20年（1945年）2月初めごろ、名古屋市の空襲が烈しくなるに従い、負傷者が激増し、その大部分は附属医院での治療を求めました。 勝沼精蔵附属医院長は、少なくとも応急治療用器具と薬品の一部は、瀬戸町に借用できそうな鉄筋コンクリートの家に疎開させる必要があるとして輸送用トラックの斡旋を依頼し、渋沢総長は県に交渉しました。 しかし、県は、医院が名古屋を離れることを市民は嫌い、趣旨には賛成するが、未だ空襲の惨禍を知らないということで、融通してくれたトラックは少なく、3月の空襲前までに極めて小部分を疎開させただけでした。

	渋沢元治『五十年間の回顧』1953 年	渋沢元治（1876–1975）は、埼玉県生まれで、実業家 渋沢栄一（1840–1931）の甥です。東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業後、欧米に留学し、逓信省、東京帝国大学に勤務し、名古屋帝国大学の初代総長（1939–1946）となり、本学の基礎作りに尽力しました。 本書の「第二編　名古屋大学創設私記」は、就任以来の日記を整理したもので、「太平洋戦争に突入したため、教官の招聘、校舎の建築、設備の充実等に意想外の支障を受け、加えて軍部の要求が益々深く教育界に浸潤し、当初抱いていた大学教育の理想の実現など思いもよらず、終には頻々たる空襲のため約 7 年間の努力の結果である校舎及び設備の大部分は焼失または破壊せられ、大学構内も荒涼たる状況を呈するに至った。……必ずや近き将来に再建せらることを期待して……」と書かれています。
	『Lesen, Denken und Arbeiten：祖父江逸郎教授退官記念』1984 年 祖父江逸郎『軍医が見た戦艦大和』2013 年	「大学を卒業した頃は第二次世界大戦が酣な頃で、直ちに海軍に入隊、青島および築地の海軍軍医学校で軍医としての基礎的な訓練と軍陣医学についての教育を受けたのち、それぞれ第一線に配属された。私は軍艦大和乗組を命ぜられ、ア号作戦、レイテ作戦などに参加、最後の特攻隊として出撃する少し前に、海軍兵学校附教官として大和を退艦、兵学校に赴任した。兵学校勤務の折、広島投下の原爆を間近に目撃、投下 2 ～ 3 日後現地調査団に加わり広島に赴き現地のあの悲惨な状態を目の辺りに見ることができた。」(『退官記念』より)
	『大学生活（昭和 15–18 年）を顧みる：十八会 50 周年記念誌』1993 年	名古屋帝国大学医学部を昭和 18 年（1943 年）に卒業した 76 名の学生による十八会が発行した記念誌です。 我等の学生生活史、座談会「恩師とその講義の思い出を語る」、座談会「亡き級友の思い出を語る」、私の大学生活、学外生活の場、当時の部活動など多彩な内容で構成されています。 学外生活の場「当時の学生馴染みの店（鶴舞近辺）」によると、名古屋市電が営業していました。

	パネル『齋藤眞先生：名古屋大学医学部の大先輩の足跡』2009 年	名古屋大学医学部学友会の第 100 回学友大会は、2009 年 9 月 26 日（土）に、名古屋観光ホテルで開催されました。このパネルは、大先輩たちの偉大な業績を振り返る展示企画として作成されたものです。 齋藤眞（さいとう　まこと　1889–1950）は、大正 6 年（1917 年）に愛知県立医学専門学校の講師ならびに県立愛知病院の外科第二部長心得に着任しました。X 線による血管撮影法、診断法など脳神経外科における優れた研究業績をあげました。昭和 19 年、陸軍省医務局付・陸軍臨時嘱託となりました。 監修者は、脳神経外科学の若林俊彦教授です。 (2013 年 9 月 11 日　学友会から寄贈)

受験生のための名古屋大学発見サイト　サイトマップ　サイトポリシー　リンク　入試に関するお問い合わせ

Nagoya University Cheers!

名古屋大学
アクセス | キャンパスマップ

名大生ボイス　名大生ブログ　名大ゆかりの著名人　フォトギャラリー　スタッフ紹介

Blog

18
Feb
2014

1　名古屋大学レクチャー2014 公開講演会に参加してきました。

18　附属図書館医学部分館ミニ展示会「戦争と大学」に行ってきました

Feb 2014

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

ブログ一覧を見る

2014/02/18

附属図書館医学部分館ミニ展示会「戦争と大学」に行ってきました

Reporter

本田　万貴
文学部3年生（2013.4現在）
出身地：愛知県

今日は名古屋大学附属図書館の医学部分館で行われているミニ展示会「戦争と大学－1931～1945　官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学」に行ってきました。

今回の展示では、名古屋大学の前身校である県立愛知医科大学が官立移管により名古屋医科大学となった1931年から、名古屋帝国大学となり(1939年)、終戦を迎える1945年までの時代を扱っています。医学部資料室に所蔵する資料の中から、第二次世界大戦中の官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学における研究や教育、医療についての様々な資料が公開されていました。

展示されている資料が多くそれら全てを紹介することはできませんが、私が特に興味を持ったいくつかを紹介しますね。（写真はクリックすると拡大できるのでぜひ色々見てください）

空襲により被災した図書

左の写真の左上にある焼け焦げた本がわかりますか？空襲により被災し焼け焦げた本です。名古屋は昭和20年3月に3度にわたり空襲を受けました。医学部や病院の建物の多くが焼失した中、鉄筋コンクリート造りの図書館は被害を免れましたが、各教室におかれていた図書の大半が焼失したそうです。

被災後に撮影された、図書館と公会堂だけが建っている写真が印象的でした。

名古屋帝国大学初代学長　渋沢元治

名古屋帝国大学の初代学長であった渋沢元治（写真下）は、学生をとても大切にし、教育に関しても自分の意見をしっかり持った人だったようです。

例えば、戦争により学生寮が不足ため、空き家を借り入れ「菊々寮」という学生寮として学生を入寮させました。寮内で学長と学生が豚鍋をつつきあう懇談会が開催され、200名余の学生が参加したそうです。今では考えられないくらい学長と学生の距離が近くて驚きました。ちなみに豚鍋代は学長のポケットマネーだったそうな。ステキですね～！

また渋沢の著書『五十年間の回顧』によると、戦争中に英語の専門用語をすべて日本語にするという動きがあったとき、渋沢はそれに対して「日本語にするほうがわかりづらく、国粋主義を発揮すべきではない！」と主張したそうです。当時そのように意見することは難しいことだと思いますが、勇気を持って言った渋沢学長はかっこいいですよね。

卒業生アルバム

1934、37、39、43年のアルバム写真が展示されていました。戦争中ということもあり、勤労奉仕や陸軍病院慰問、野砲第三連隊見学など戦争色の濃いものが多いのですが、中には松茸狩りなど楽しそうな写真がありました。すごいですよね、松茸狩りだなんて！みんなで七輪を囲んで松茸を焼いている様子が写っていました。

そうやって楽しんでいる姿を見ると私達と同じだなと思いました。

戦争ってやっぱり悲しいですよね。展示されている史料の中にもそんな悲しさを伝えるものがありました。しかしそのような史料の中には悲しさや辛さだけでなく、厳しい状況の中でも人の役に立つ医者になるんだ、医療を発展させていくんだという学生や教師の熱い気持ちが残されているのだなと感じました。

ミニ展示に加え、医学部史料室を見学しました。

史料室には、名古屋大学の前身校の県立愛知医科大学のお雇い外国人であったローレツや、24歳で校長に就任し、後に政治家として活躍した後藤新平などに関する史料、また江戸時代の薬箱や種痘用具など日本の医学の発展の足跡をたどることができる貴重な史料がたくさんありました。たぶん皆さんが見たことないようなものがたくさんありますよ！！

ミニ展示は5月30日まで、医学部史料室は通常カギがかかっていますが希望すれば案内してくれるということなのでぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

主催：名古屋大学 附属図書館医学部分館／大学文書資料室

企画展

戦争と大学

－1931～1945 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学－

入場無料

2014 8. 1 FRI - 8. 31 SUN

開展時間　平日：８時－２１時３０分　土日：８時４５分－１６時３０分

※２５日（月）は図書館休館のため、展示もご覧いただけません。

※２日（土）と３日（日）は２１時３０分まで開展しています。

名古屋大学中央図書館 ２階 ビブリオサロン

（東山キャンパス、地下鉄名城線「名古屋大学駅」下車）

名古屋大学は、名古屋帝国大学として、1939年（昭和14）年という戦時体制下に誕生した大学です。また、前身校である名古屋医科大学も1931年に官立移管されました。つまり、その草創期は、満州事変から日中戦争、太平洋戦争を経て、1945年の敗戦までの時代と重なります。

企画展「戦争と大学」は、今年２～６月に附属図書館医学部分館が開催したミニ展示「戦争と大学」に展示された同館所蔵史料に、大学文書資料室が所蔵する史料やパネル等を増補し、戦時期の名古屋大学の研究・教育・医療・学生生活などについて展示します。

【ご連絡先】　大学文書資料室（東山キャンパス）
☎052-789-2046　✉nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
附属図書館医学部分館（鶴舞キャンパス）
☎052-744-2505　✉library2@med.nagoya-u.ac.jp

企画展

戦争と大学

―1931～1945 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学―

本学は、名古屋帝国大学として、1939（昭和14）年という戦時体制下に誕生した大学です。医学部の前身校である名古屋医科大学も、1931年に官立移管されました。その草創期は、満州事変から日中戦争、太平洋戦争をへて、1945年の敗戦までの時代と重なります。

本企画展は、附属図書館医学部分館が今年開催した「戦争と大学」で展示した同館所蔵史料に、大学文書資料室が所蔵する史料やパネルを増補したものです。

本学の教職員や学生たちが、戦争という状況の制約をうけながらも、その草創期を生き抜き、本学の礎を形作っていった時代の一端を感じとっていただけたらこの上ないことと思います。

附属図書館医学部分館長　濵嶋 信之
大学文書資料室長　鮎京 正訓

展示会場全景写真（東山）

会場入口

企画展全景①

企画展全景②

企画展全景③

コーナー・展示ケース等全景写真（東山）

あいさつパネル

第１コーナー全景

第１コーナー（ケース 1-1）

第１コーナー（ケース 1-2）

第２コーナー全景

第２コーナー（ケース２）

第３コーナー全景①

第３コーナー全景②

第３コーナー（ケース 3-1）

第３コーナー（ケース 3-2）

第３コーナー（ケース 3-3）

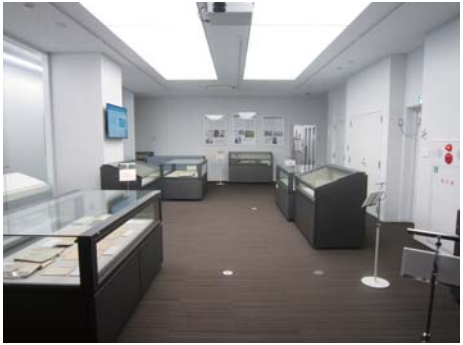
第３コーナー（ショウウインドウ）

第 3 コーナー（ケース 3-4）

第 4 コーナー全景（右の一角）

第 4 コーナー（ケース 4-1）

第 4 コーナー（ケース 4-2）



第５コーナー全景（中央最奥壁側）

第５コーナー（ケース５）

企画展「戦争と大学」（東山）展示物一覧

展示番号	資料名	説明文（※備考）
1 満州事変後の名古屋医科大学		
ケース 1-1-1	医学講演会と標本展覧会　ポスター 1934 年 11 月	講師の小宮喬介教授は鑑識科学（特に指紋の研究）、桐原眞一教授は胃がんの早期発見を実現した「桐原式胃鏡」の開発、大庭士郎教授は局所免疫、血液型、ろ過性病原体の研究で知られています。主催の名古屋医科大学学生部会は、名医大の学友会である鶴天学友会（現在の名古屋大学医学部学友会）に設置された、学生による自治的組織です。
ケース 1-1-2	大学祭医学標本展覧会　主要出品目録 1934 年 11 月	名古屋医科大学学生部会は、1934（昭和 9）年 11 月 3 日（土）から 10 日（土）かけて大学祭を開催しました。主な行事として、3 ～ 4 日には医学標本展覧会（学生ホール、図書館）、4 日には医学講演会（講堂）と運動会（八事運動場）、5 ～ 7 日にはスポーツ大会、10 日には「音楽と映画の夕」（名古屋市公会堂）、などがおこなわれました。
ケース 1-1-3	名古屋医科大学運動会プログラム 1934 年 11 月	なし。
ケース 1-1-4	第二回綜合文化講演会　ポスター 1936 年 10 月	主催の名古屋医科大学学生部会は、この講演会を「私達の純真にして真剣なる名古屋文化向上運動」と位置づけました。講師の野田哲夫は、ドイツに留学し、日本人として初めて航空力学を学び、三菱重工業名古屋航空機製作所の技師となりました。三菱重工は、戦時体制下の名古屋において軍用機の生産を飛躍的に伸ばし、日本最大の航空機生産地名古屋の一翼をにないました。

ケース 1-1-5	第 8 回卒業アルバム　1939 年	名古屋医科大学最後の卒業アルバムです。名古屋帝国大学が 1939 年に創立された時、名古屋医科大学の在校生は名古屋帝国大学医学部の学生として編入されました。タイトルページに「2599」とあり、日本書紀に基づく神武天皇即位を起点とする皇紀の数字が表記されていることからも、時代状況が感じられます。※毒ガス訓練、勤労奉仕、陸軍病院慰問の写真のページ
ケース 1-1-6	軍事教練の査閲	※ 1934 年度卒業アルバム掲載、スキャニング拡大・ラミネート加工写真。
ケース 1-2-1	愛国報国機「大学高専号」献納日延期等決議　1934 年 2 月	民間からの寄付金によって陸軍に献納される航空機を愛国機、海軍に献納される航空機を報国機といいました。この資料から、思うように寄付金が集まらず、その締め切りや航空機献納日の延期がなされたことが分かります。まだ本格的な戦時体制に移行する前の時代だからでしょうか。
ケース 1-2-2	教学刷新評議会の答申と建議（名古屋医科大学『昭和十一年　文部省通達綴』）1936 年 10 月	1935（昭和 10）年の天皇機関説事件をきっかけに、文部大臣の諮問機関として設置されたのが教学刷新評議会です。その答申や建議の復古主義的・精神主義的な内容は、その後の日本の教育政策にきわめて大きな影響を与えました。
ケース 1-2-3	「国家総動員法」小冊子　名古屋医科大学配属将校用	1938 年公布・施行の国家総動員法の全文が掲載された小冊子です。表紙には、「名古屋医科大学配属将校」とあります。配属将校とは、軍事教練のために学校へ派遣された軍人のことです。
ケース 1-2-4	第五学期時間表　1938 年 9 ～ 12 月	名古屋医科大学は 1 年度 3 学期制のため、第 5 学期とは 2 年生における 2 番目の学期（9 月～ 12 月）のことです。配属将校を担当とする教練（軍事教練）も正課に組み入れられています。裏面には、「共済部指定商人」として、洋服店、時計店、靴店等の案内があります。
パネル 1	鶴舞の医科大学	※第 19 回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立 70 周年（創基 138 周年）記念―」（2009 年）の展示パネル

2 名古屋帝国大学の誕生		
ケース 2–1	綜合大学建設方に関する件　1937 年 12 月	1937 年 12 月の愛知県会において 26 名の議員が提出し、満場一致で議決された意見書です。近衛文麿首相ら閣僚や愛知県知事に提出され、名古屋帝国大学設置運動が本格化するきっかけとなりました。
ケース 2–2	名古屋帝国大学医学部　学生証　1939 年 12 月	なし。
ケース 2–3	開学記念絵はがき　1943 年 5 月	開学記念式の参列者に配布された記念絵はがきです。絵図面には、名帝大の現在の写真と、東山キャンパスの完成予想図が刷られました。
ケース 2–4	開学記念式典記念品　1943 年 5 月	名古屋帝国大学は、1942 年に理工学部を工学部と理学部に分離し、ついで 43 年 4 月には初めて医学部以外の卒業生を送り出しました。こうして総合大学としての体裁が一応整うと、医学部学友会からの寄付を得て、43 年 5 月 1 日に開学記念式を大々的に開催しました。この記念品は、医学部前身の愛知県立医学専門学校の卒業生で、戦前戦後の約 30 年にわたって衆議院議員を務め、衆議院議長や法務大臣を歴任した加藤鐐五郎の遺品です。
ケース 2–5	名古屋帝国大学創立概要　1943 年	大学創立までの経緯、創立から 1943 年までの経過、現状をまとめたものです。上で開いたページには、名古屋帝国大学が、その創設費（1939 年度愛知県予算総額の約 20％に相当）を、愛知県が全額負担することによって設置されたことが記されています。
ケース 2–6	渋沢元治「我等の学園」1943 年 6 月	「和を以て貴しと為す」を大学の座右の銘とした渋沢元治総長は、教員と学生の意思疎通をはかるため、総長のポケットマネーで豚鍋などを食べながら語り合う「総長懇談会」をたびたびおこないました。この小冊子は、43 年 6 月の総長懇談会で総長が話した内容をまとめたものです。※閉じてある冊子は複製。

パネル 2	名古屋帝国大学の誕生	※第 19 回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立 70 周年(創基 138 周年)記念―」(2009 年) の展示パネル
パネル 3	東山キャンパスの形成	※第 19 回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立 70 周年(創基 138 周年)記念―」(2009 年) の展示パネル
3 戦争と名古屋帝国大学		
ケース 3-1-1	十八会アルバム	名古屋帝国大学医学部の 1943（昭和 18）年卒業生同窓会である十八会による、在学時代の写真を集めたアルバムです。※ 勤労奉仕、軍事教練、部活動など
ケース 3-1-2	『十八会 50 周年記念誌　大学生活（昭和 15 ～ 18 年）を顧みる』1997 年	十八会は、名古屋帝国大学医学部の 1943（昭和 18）年卒業生の同窓会です。
ケース 3-2-1	1942 年度第 1 学期　理学部化学科授業時間表　1942 年	1942 年度から、工学部と理学部の授業が東山でもおこなわれるようになりました。ただ、理学部の校舎は戦時体制下の物資及びその輸送力の不足のため年度初めに間に合わず、一時的に工学部の教室も使って授業がおこなわれました。
ケース 3-2-2	学校報国隊名古屋地方部の腕章	1941（昭和 16）年、学校ごとに全ての学生や教職員を軍隊式に組織化したのが学校報国隊です。文部省に本部が、全国に 10 の地方部が置かれました。名古屋帝国大学にも報国隊が結成されたほか、総長は学校報国隊名古屋地方部長となりました。この腕章は、当時の山崎一雄理学部教授のものです。
ケース 3-2-3	名古屋帝国大学報国会　会報　創刊号・第 2 号　1941 ～ 1942 年	1941 年 5 月、文部大臣の指示に基づき、名古屋帝国大学体育会を解散して結成されたのが報国会です。「我が国教学の本義に徴し、全学和衷協同各其の分をつくし、もって大道に帰一せんこと」（会則第 2 条）を目的とする報国会は、教養講座、体力検定、スポーツ大会、映画会、レコードコンサートなどを催しました。

ケース 3-2-4	医学部助手・臨時附属医学専門部授業補助の辞令	名古屋帝国大学は、その創立と同時に、軍医養成のための臨時附属医学専門部を設置しました（1944 年 4 月には附属医学専門部と改称）。この人物は名古屋市に生まれ、第八高等学校、名古屋医科大学を卒業、1942（昭和 17）年に名帝大医学部助手となりました。44 年には臨時附属医学専門部授業補助の嘱託を受けています。
ケース 3-2-5	渋沢元治著『五十年間の回顧』1953 年	なし。
ケース 3-3-1	昭和十八年度在学年限又は修業年限の臨時短縮に関する件〔写〕1942 年	文部省は、軍の下級幹部や戦時体制を支える労務員を少しでも早く確保するため、高等教育機関の在学・修業年限を短縮する措置をとりました。名帝大でも、41 年度に 3 ヵ月、42 年度からは 6 ヵ月の在学年限が短縮されました。これにより、医学部生は 3 年半、工学部生・理学部生は 2 年半の在学で、9 月に繰り上げ卒業していきました。
ケース 3-3-2	『Lesen, Denken und Arbeiten：祖父江逸郎教授退官記念』1984 年	祖父江逸郎名古屋大学名誉教授は、1943 年 9 月に名古屋帝国大学医学部を卒業すると海軍に入隊、軍医中尉として戦艦大和に配属され、レイテ沖海戦などに参加しました。大和が撃沈された最後の出撃の 4 ヵ月前に異動となり、広島県江田島の海軍兵学校へ教官として赴任、原爆投下 2 ～ 3 日後の広島の惨状を目の当たりにしました。
ケース 3-3-3	祖父江逸郎著『軍医が見た戦艦大和』2013 年	祖父江逸郎名古屋大学名誉教授は、1943 年 9 月に名古屋帝国大学医学部を卒業すると海軍に入隊、軍医中尉として戦艦大和に配属され、レイテ沖海戦などに参加しました。大和が撃沈された最後の出撃の 4 ヵ月前に異動となり、広島県江田島の海軍兵学校へ教官として赴任、原爆投下 2 ～ 3 日後の広島の惨状を目の当たりにしました。

ショウウインドウ1	汪兆銘の死亡を知らせる掲示の写真	汪兆銘（汪精衛）は、中国国民政府における親日派の重鎮で、1940年に日本占領下の南京で樹立された南京国民政府の首席となりました。体調が悪化していた汪は、44年3月に名帝大医学部附属医院に極秘入院しました。附属医院を挙げての主治医団が治療にあたり、脳神経外科学の第一人者である齋藤眞教授が手術をおこないました。それでも症状は改善されず、やがて多発性骨髄腫であったことが分かりました。政府や軍からは、汪を少しでも延命させるよう強い要望がありましたが、同年11月10日、附属医院で死去しました。
ショウウインドウ2	田ノ井貞治氏手記「汪兆銘と森光子」〔写〕2009年　田ノ井千春氏所蔵・西田　勝氏提供	医師の田ノ井貞治氏（故人）は、1942年に名古屋帝国大学医学部附属医院第一外科（齋藤眞教授、汪兆銘の手術を執刀）の医局に入り、汪兆銘が死去した夜は医学部に当直として詰めていました。その時に、汪の護衛官であった大尉が、汪が死去した翌朝、ピストル自殺したことを知りました。そして2007年、新聞記事で森光子さんとその大尉の関係を知った田ノ井氏は、森光子さんに手紙でこのことを知らせました。森さんから、面会して話を聴きたいとの返事がきましたが、それ以上のことは知らないとことわったそうです。※新発見された史料
ショウウインドウ3	森光子「汪兆銘護衛官との恋」『文藝春秋』第87巻第11号所収　2009（平成21）年9月	2012年に92歳で亡くなった俳優の森光子さんは、軍の慰問団に歌手として参加し、各地を回っているさなか、中国南京で海軍大尉と出会い、お互いに意識し合うようになりました。その後、汪兆銘が入院していた頃の名古屋で二人は再会、大尉は森さんの実家を訪ね、森さんの伯父に結婚の許しを乞いました。しかし、それを最後に大尉は消息を絶ち、悲恋に終わりました。その後、戦犯として処刑された、名古屋で病死した、ピストルで自殺した、などの知らせが森さんにとどいたそうです。

ケース 3-4-1	大日本航空医学会機関雑誌『航空医学』1943 ～ 1944 年	1943 年 2 月、名古屋帝国大学の医学部航空医学二講座が独立し、航空医学研究所が設置されました。これは、名古屋が航空機の一大生産地となっていたことを背景にしています。また、ミッドウェー海戦などで大打撃をうけ、航空戦力の回復をめざす軍部にとっても、高高度や急激な高度変化の人体への影響を研究する航空医学は重要でした。大日本航空医学会は、43 年 4 月に発会しました。陸軍航空本部医務部内に置かれ、機関誌の編集者も陸軍航空技術研究所の人間という、陸軍の外郭団体的な性格を持っていました。名帝大航空医学研究所からも論稿が寄稿されています。※ 4 冊を（1 冊は開いて）展示
ケース 3-4-2	名古屋帝国大学戦時科学研究会（案）1943 年 9 月	1943 年 8 月、「科学研究の緊急整備方策要綱」が閣議決定され、大学における科学技術研究を全面的に決戦体制へと動員することになりました。これをうけて、各帝国大学で学部横断的な研究組織が結成されていきました。名古屋帝国大学では、43 年 9 月の評議会において、渋沢総長から戦時科学研究会の設置が提案され、組織構成案と会則案が承認されました。しかし、同研究会が具体的にどのような研究活動をおこなっていたのかは全く分かっていません。※〔名古屋帝国大学〕庶務課「自昭和十八年一月至昭和十九年十月　評議会記録」所収
ケース 3-4-3	科学技術者登録に関する心得　1944 年	1944 年 2 月、国民職業能力申告令の改正にともない、科学技術者の登録制度が創設されました。この場合の「科学技術者」とは、大学や専門学校などの理工系の高等教育機関を卒業した者全てであり、範囲がたいへん広いものでした。この職業能力申告手帳は、名帝大理学部の山崎一雄教授のものです。
ケース 3-4-4	職業能力申告手帳　厚生省　1944 年	1944 年 2 月、国民職業能力申告令の改正にともない、科学技術者の登録制度が創設されました。この場合の「科学技術者」とは、大学や専門学校などの理工系の高等教育機関を卒業した者全てであり、範囲がたいへん広いものでした。この職業能力申告手帳は、名帝大理学部の山崎一雄教授のものです。

ケース 3-4-5	技術院「戦時研究員制度に就て」 1944 年 12 月	1943 年 10 月に、技術院（42 年に新設）の主導により内閣が設けたのが、戦時研究員制度です。戦時研究員は、戦争目的の達成のため、国が全力をかたむけて急速に成果をあげる必要のある科学技術の重要課題に取り組む、とされました。内閣総理大臣を長とする研究動員会議が決定する戦時研究員は、1944 年には 1,122 人にのぼりました。同年の研究課題は 183 で、その 7 割の担当官庁が陸軍省と海軍省でした。※付・技術院参技官の名刺
ケース 3-4-6	戦時研究要員調書提出に関する件 1945 年 4 月	戦時研究員には、大学の教授などが任命されましたが、これを補助研究員、研究助手、技能工員などが補佐しました。それらを戦時研究要員といいましたが、同じ大学だけではなく、他の機関の者も加わりました。
ケース 3-4-7	戦時研究に対する要員召集延期に関する件　1945 年 4 月	技術院が戦時研究員に対し、自分の研究に従事する要員のうち、軍への召集を延期すべき者のリストの提出を求めた文書です。
パネル 4	東山キャンパス計画	第 19 回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立 70 周年（創基 138 周年）記念―」（2009 年）の展示パネル
パネル 5	初期の大学生活	第 19 回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立 70 周年（創基 138 周年）記念―」（2009 年）の展示パネル
パネル 6	ちょっと名大史 130　学部の誕生と草創期⑤―医学部―	※『名大トピックス』第 237 号（2013 年 2 月掲載）をパネル化
パネル 7	ちょっと名大史 134　学部の誕生と草創期⑦―工学部―	※『名大トピックス』第 241 号（2013 年 6 月掲載）をパネル化
パネル 8	ちょっと名大史 126　学部の誕生と草創期③―理学部―	※『名大トピックス』第 233 号（2012 年 10 月掲載）をパネル化
パネル 9	ちょっと名大史 21　汪兆銘（汪精衛）の梅	※『名大トピックス』第 128 号（2004 年 1 月掲載）をパネル化 ※ショウウインドウの展示スペースに展示

4 空襲と名古屋帝国大学		
ケース 4-1-1	東山への空襲当日の柴田雄次理学部長の日記　1945 年 5 月　柴田純子氏所蔵	大学本部、理学部、工学部の一部、航空医学研究所などがあった東山地区は、5 月 14 日に大きな空襲をうけました。これにより、大学本部と工学部の多く、理学部の一部（生物学教室）、航空医学研究所の一部を焼失しました。ただ、3 月の鶴舞への空襲をうけて、すでに東山地区の研究室は各地への疎開をおおむね完了し、図書や重量のある機具類は地下に埋蔵するなどの措置がとられていました。※この企画展で初公開　※柴田雄次の写真を添付
ケース 4-1-2	名古屋帝国大学の空襲被災状況	※『名古屋大学五十年史　通史一』560 頁の表より作成した小パネル
ケース 4-2-1	医学部附属医院「病院防空」1943 年 4 月	医学部附属医院事務長の山元昌之は、病院の防空対策について研究を重ねましたが、備忘用にまとめてあった内容が勝沼精蔵医院長の目に止まり、その一部が『名古屋医学会雑誌』に掲載されました。そこに公表できない内容について、部外秘としてまとめたのがこの小冊子です。
ケース 4-2-2	空襲で灰燼に帰した医学部	鶴舞の医学部は、1945（昭和 20）年 3 月 12 日、19 日、25 日の 3 回にわたる大空襲により、壊滅的な被害をうけました。とくに医学部棟はほぼ全てを焼失してしまいました。ただ、事前の避難計画がしっかりしていたため、教職員や学生、病院の患者の死傷者はほとんど出なかったとされます。ただし、3 回の空襲による死傷者数については、公的な記録は発見されていません。※「昭和 20 年　戦災消失（ママ）跡地写真〜昭和 28 年頃　新病棟建設（建物関係）」所収写真
ケース 4-2-3	医学部空襲被害箇所要図	なし。
ケース 4-2-4	勝沼精蔵・山元昌之「病院防空―戦跡と戦訓―」1945 年 4 月	医学部附属医院の勝沼医院長と山元事務長が、医学部が空襲をうけた翌月に、「秘」として発行したものです。3 月の附属医院への空襲の詳細な記録と、そこから得られたさまざまな課題が記載されています。43 年の「病院防空」とは全く別の資料です。

ケース 4-2-5	空襲により被災した図書　1945 年 3 月	附属図書館は鉄筋コンクリート製だったこともあり、その蔵書のほとんどは被害をまぬがれましたが、一般の校舎にあった図書はその大半が失われました。附属図書館医学部分館医学部史料室には、この空襲で焼けかかった図書が展示されています。損傷がいちじるしいため移動が難しく、今回の企画展では写真のみとしました。※現物は附属図書館医学部分館医学部史料室で展示されている。移動が難しいため写真をパネル化して展示。
ケース 4-2-6	医学部附属医院救護病院救護班「空襲ニ因ル外傷患者ノ治療成績」1945 年 3 ～ 8 月	名古屋市への空襲が頻繁になると、その負傷者の治療のため、行政や市民の医学部附属医院への期待がますます高まりました。これにより、病院施設を本格的に疎開させることができず、3 月の空襲をむかえることになりました。
パネル 10	戦時下の名帝大	※第 19 回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立 70 周年（創基 138 周年）記念―」（2009 年）の展示パネル　※ショウウインドウの展示スペースに展示
パネル 11	空襲による被害	※第 19 回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立 70 周年（創基 138 周年）記念―」（2009 年）の展示パネル　※ショウウインドウの展示スペースに展示
5 敗戦と名古屋帝国大学		
ケース 5-1	敗戦直後の名古屋帝国大学評議会記録 1945 年 8 月	前日から連合国軍の日本進駐が開始された 8 月 29 日、3 時間に及ぶ評議会がおこなわれました。しかし記録には、「時局急変による新事態に対する文部省指示事項その他につき懇談せり」とのみ記されています。評議会とは、総長（議長）、各学部長、各学部から 2 名ずつ選出の教授を正規の構成員として、大学の重要事項を審議する会議です。※「自昭和二十年四月～至昭和二十三年十二月　評議会議事録 2」所収

ケース 5–2	工学部教授会議事録　1945 年 10 月	連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）は、日本の非軍事化をはかるため、航空機の教育研究を禁じました。名古屋帝国大学では、航空医学研究所が廃止をよぎなくされました。そのほか、この議事録にもあるように、工学部の航空学科もその影響をうけて物理工学科に改組されたのち、工学部の航空関係講座はいったん姿を消すことになりました。その後、1956 年ににになって航空学科が復活しています。
ケース 5–3	反軍国主義・自由主義的傾向や言動のため職を追われた教員・教育行政関係者の再任用に関する通知　1945 年 11 月	※「昭和二十年□月始　聯合軍二関スル通帳綴　秘書掛」所収
パネル 12	ちょっと名大史 85　名帝大に設置された国産初の商用電子顕微鏡	※『名大トピックス』第 192 号（2009 年 5 月掲載）をパネル化
パネル 13	ちょっと名大史 53　航空医学から宇宙医学へ	※『名大トピックス』第 160 号（2006 年 9 月掲載）をパネル化
パネル 14	ちょっと名大史 89　豊川キャンパスと豊川海軍工廠	※『名大トピックス』第 195 号（2009 年 8 月掲載）をパネル化

※展示番号は、本稿掲載の写真に付したキャプションと対応している。「1–1–1」は、第 1 コーナーの 1 番目のケースの中の 1 つめの展示資料という意味である。

※パネルの具体的な内容については、企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで」のものについては堀田慎一郎「企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念―』」（『名古屋大学大学文書資料室紀要』第一八号、二〇一〇年三月、名古屋大学学術機関リポジトリで閲覧・ダウンロード可能）を、「ちょっと名大史」のものついては名古屋大学の HP 掲載の『名大トピックス』バックナンバーか大学文書資料室の HP 掲載のバックナンバーをご覧いただきたい。

※所蔵者が明記されていない資料については、グレーの色が付いているものが大学文書資料室所蔵、それ以外は附属図書館医学部分館（医学部史料室）所蔵である。

展示物個別写真（東山）　第１コーナー

ケース 1-1-1

ケース 1-1-2

昭和九年十一月四日　午前十時

名古屋醫科大學運動會プログラム

ケース 1-1-3

第三回綜合文化講演會

一、鳥と飛行機

二、醫學の文化的特質

三、日支問題の過去と現在

三菱鑛業株式會社常務取締役　野田哲夫氏

名古屋醫科大學教授醫學博士　杉田直樹氏

東京朝日新聞社顧問法學博士　米田實氏

入場無料

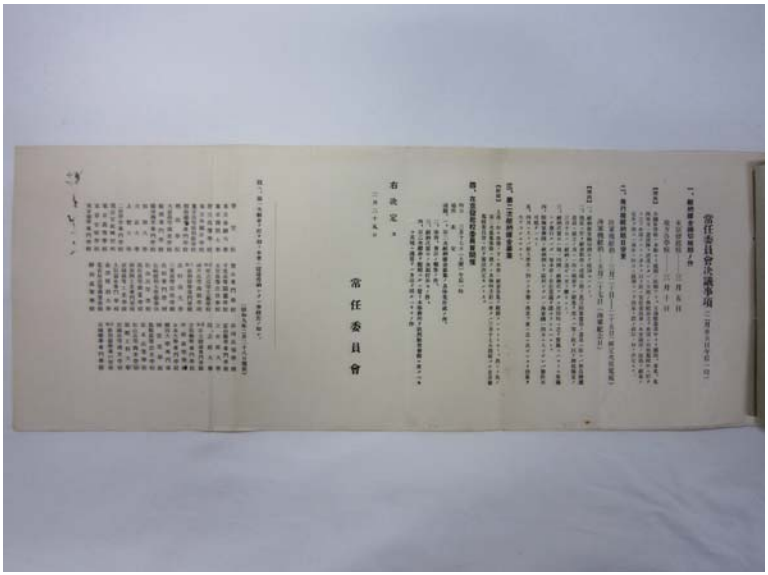
日時　十月九日(金)午後六時半

所場　名古屋朝日會館

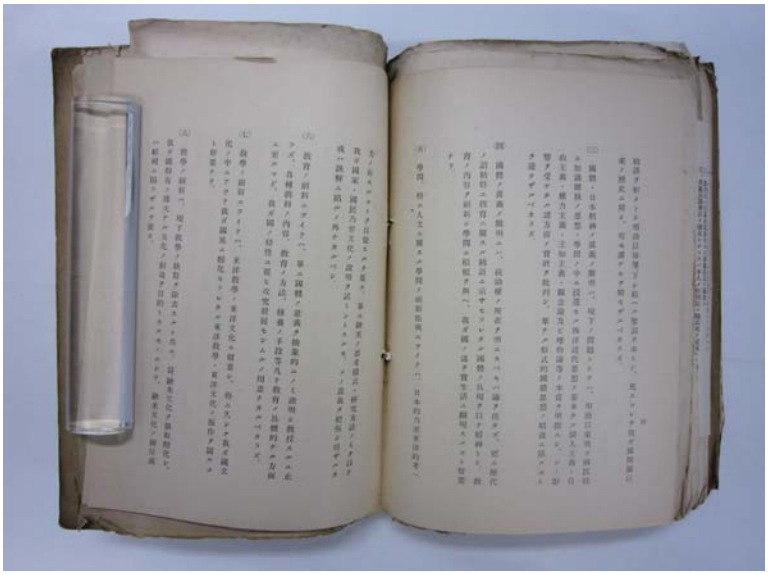
主催　名古屋醫科大學學生部會
大阪朝日新聞名古屋支社

ケース 1-1-4

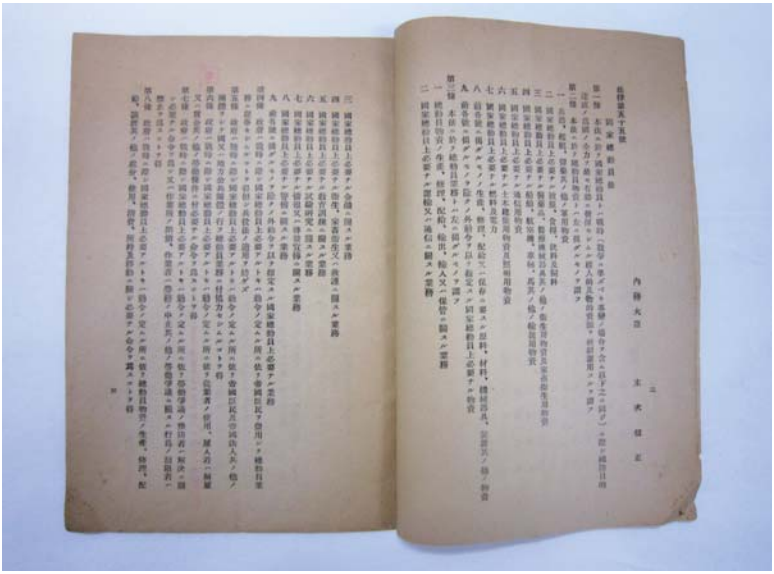
ケース 1-1-5・6



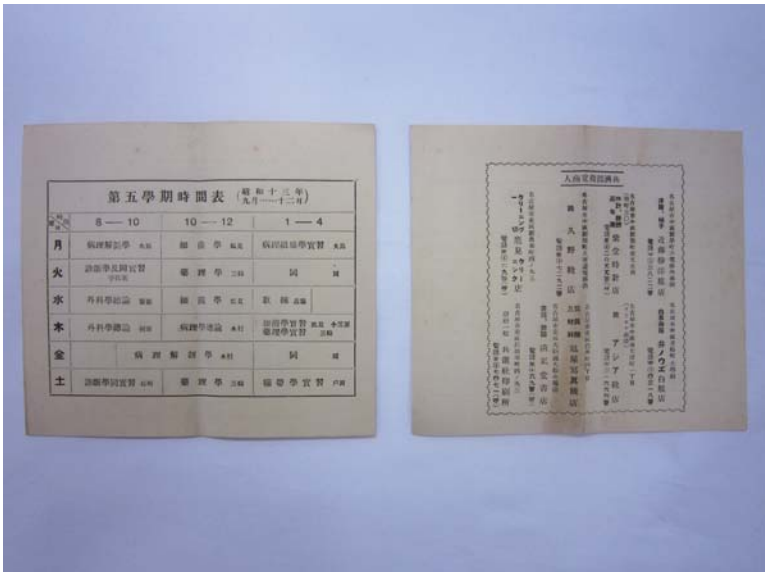
ケース 1-2-1



ケース 1-2-2



ケース 1-2-3



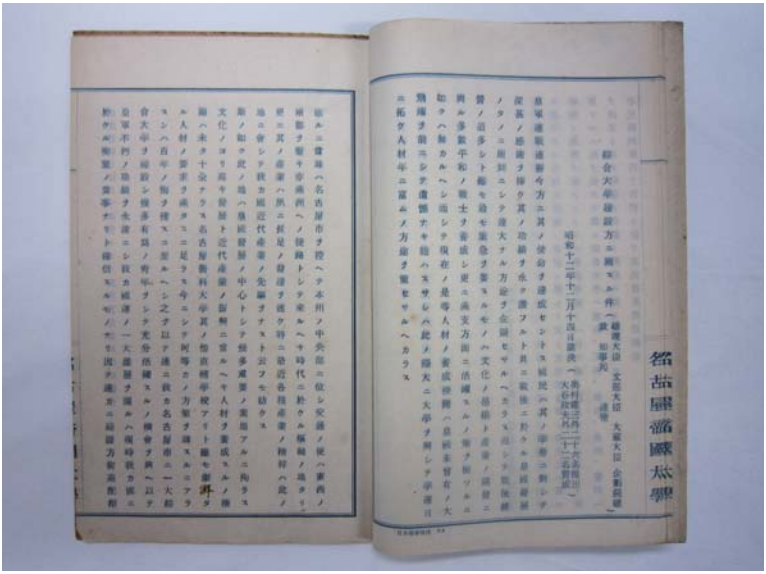
第五學期時間表（昭和十三年九月—十二月）

曜日	8 — 10	10 — 12	1 — 4
月	病理解剖學 木原	細菌學 藤見	病原細菌學實習 木原
火	診斷學及問診實習 宇佐美	藥理學 三輪	同
水	外科學總論 藤巻	細菌學 藤見	獸醫 藤原
木	外科學總論 同	病理學總論 木村	細菌學實習 藤見 小笠原 藥理學實習 三輪
金	病理解剖學 木村		同
土	診斷學問實習 石川	藥理學 三輪	獸醫學實習 戸澤

本講義指定商人

近藤修平堂 [illegible]
白鳥書屋 [illegible]
井ノウエ口腔店 [illegible]
[illegible] 久野鞄店 [illegible]
[illegible] 柴金時計店 [illegible]
[illegible] アジア鞄店 [illegible]
[illegible] 丸屋写真機店 [illegible]
[illegible] 清水堂書店 [illegible]
[illegible] 共進社印刷所 [illegible]
[illegible] 荒見ミウラ店 [illegible]

ケース 1-2-4

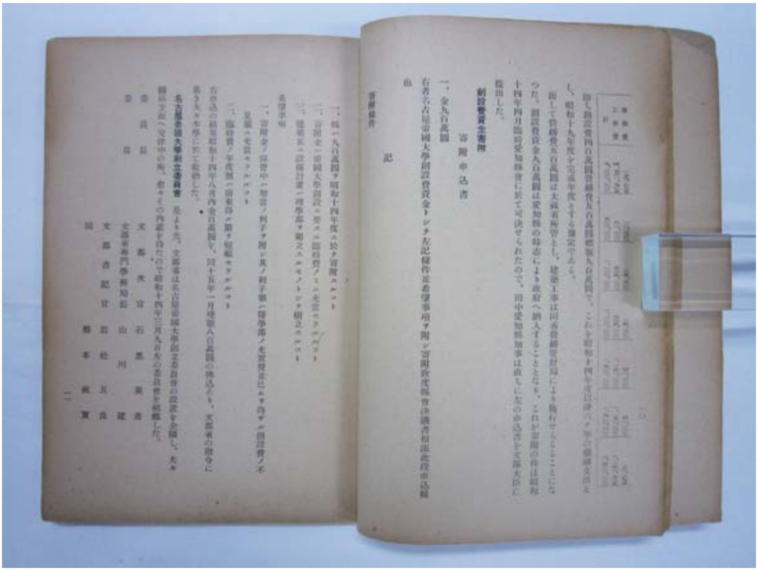


ケース 2-1

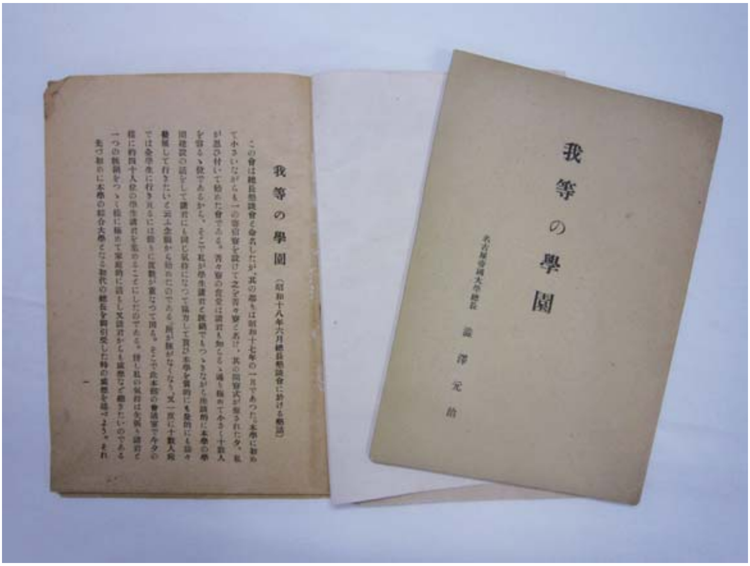
ケース 2-2

ケース 2–3

ケース 2–4



ケース 2-5



ケース 2-6

第３コーナー

ケース 3-1-1（左半分）

ケース 3-1-1（右半分）

思い出すままに

「戦時色に彩られた学生生活」

ケース 3-1-2

理學部化學科授業時間表（昭和十七年度第一學期）

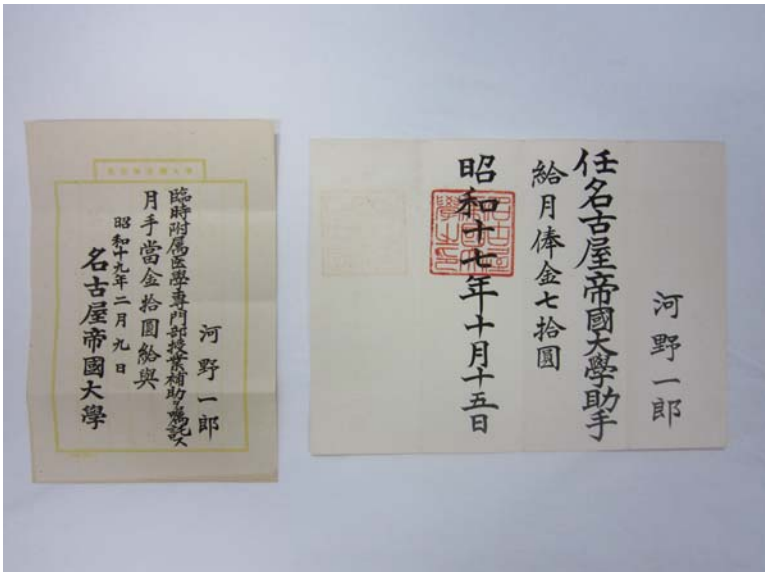
曜日＼時限	1	2	3	4	5	6	7	8
月		膠質學（2）	有機化學（1）	有機化學（隔週）（4）（3）				
火	實驗物理學概論（東）							
水	理論化學（第一）（1）		分析化學（2）				散乳（工）	
木	實驗物理學概論（東）	數 ~~（東）~~	~~數~~ 數東學		分析化學 ~~（4）~~			
金		理論化學（第一）（3）	無機化學（3）	分析化學（4）				
土	無機化學	無機化學實驗（3）	膠質學（4）	無機化學（4）				

アラビア數字は二學期授業の週時數を示し、（東）は東山校舎の時。

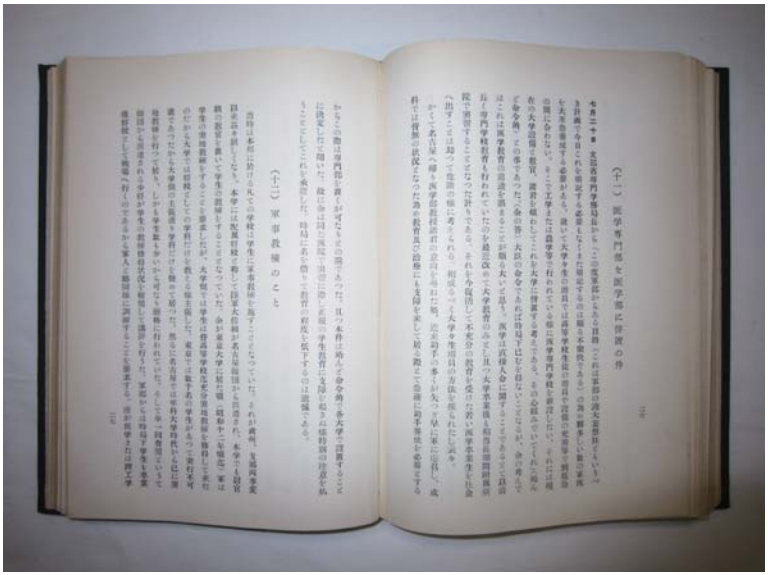
ケース 3-2-1

ケース 3-2-2

ケース 3-2-3

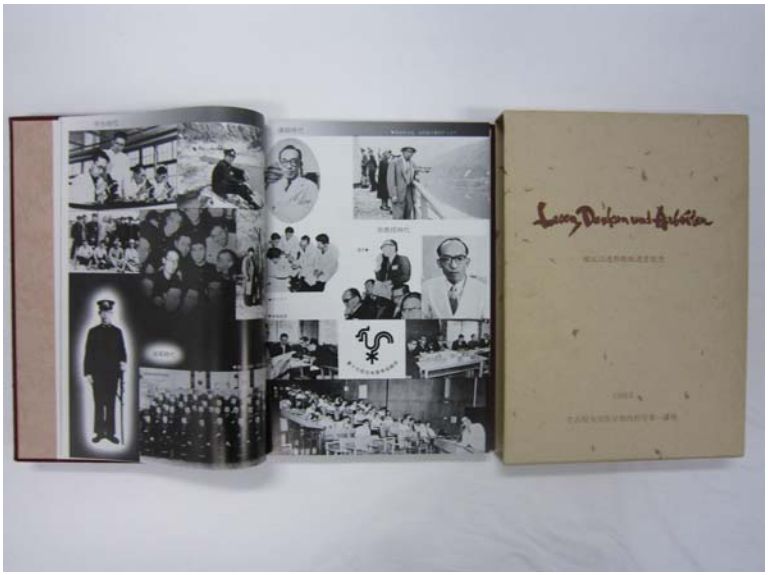


ケース 3-2-4



ケース 3-2-5

ケース 3-3-1



ケース 3-3-2

ケース 3-3-3

汪兆銘氏の入院

昭和十九年三月三日時の南京政府主席汪兆銘氏は本院に入院し次のような医師団による最高の治療を受けたが終に同年十一月十日逝去された。

主治医団

外科　斉藤　真　名古屋帝国大学教授

整形外科　高木憲次　東京帝国大学教授

名倉重雄　名古屋帝国大学教授

内科　勝沼精蔵　名古屋帝国大学教授　附属医院長

黒川利雄　東北帝国大学教授

放射線科　田村春吉　名古屋帝国大学教授　医学部長

三矢辰雄　名古屋帝国大学教授

助手団

戸田　博　名古屋帝国大学助教授

上田文男　名古屋帝国大学附属医学専門部教授

中沢由也　陸軍軍医少佐

太田元次　陸軍軍医大尉

病名

多発性骨髄腫

使用薬剤

[illegible]

[illegible]

ショウウインドウ 1

り受け開業したり、松浦先生は犬山の父親の病院を継がれたり、名古屋に帰ってきたのは私と皮膚科・内科の各一人ずつであった。そこで戦時中、工員の寮だった所を改造してささやかな病院として診療を始めたが財閥解体論なるものがやかましく、病院の再建など目途が立たず、私は医局に帰る決断をした。

汪兆銘と森光子

森光子さんは二〇〇七年十二月中旬の日本経済新聞に「私の履歴書」という表題で次のような記事を載せていた。はじめ南方へ慰問団として派遣されていた。帰国して二か月ほど経った昭和十九年四月末、今度は中国の上海・南京・漢口　武漢　などを慰問することになった。上海では傷病兵海軍士官を見舞、船の甲板で歌や踊りを御見せした。長江をさかのぼって南京から漢口にたどりつく頃には、蒸し暑さと疲労とでへとへとになっていた。私は暑さに弱い。再び南京に戻った五月の末ころ、体がだるく熱っぽくなり、痩せてきた。　あなた、体が悪いんじゃありませんか　ある日の慰問が終わったとき海軍士官が声をかけてきた。一度見てもらいましょう

ショウウインドウ２

と　海軍関係の医務室につれていってもらい、肺浸潤の診断を受けた。森さん、安静にしなくっては　。白い海軍士官の服を着た、その親切な紳士は滝仲孟雄大尉といった。ほどなく私は内地にかえった。その年の秋、名古屋の大須劇場に出演していた時、滝仲大尉か楽屋を訪ねてきた。たまたま名古屋にいて新聞に載った「劇団南十字星と森光子」の記事を目にしたらしい。当時は南京に親日の汪兆銘政権があった。滝仲大尉は汪兆銘お付きの護衛官であり、専用機の操縦士であった。病気になった汪兆銘を南京から名古屋の病院にお連れしているということだった。海軍の将校は、若い女性の憧憬の的で、年頃の私が訪ねられて嬉しくないはずはない。ただ男女の交際ははばかられる時代だった。すき焼きを御馳走になり「戦局は厳しい」と聞いた覚えがある。滝仲大尉は私が地方巡業に出ている時、京都の伯父の家を訪ねてくれたこともある。結婚という言葉が出たかどうか、ただそのようなことを言っていたと叔父は知らせてくれた。それから滝仲大尉の行方が知れなくなった・・と書かれていた。これを知っているのは私ぐらいか　と考え森光子さんに知らせてあげよ

ショウウインドウ２

うと筆をとった。当時、私は三菱発動機病院に在職していたが、医局在籍の人に召集令が入ると二人以上派遣している病院から一週間から二週間医局に召集されていた。たまたま汪兆銘の死亡前後医局に召集されていた。汪兆銘の死亡した夜、私は大学の当直していた。その夜、自動車のクラクションが何回も聞かれた。当時は戦時中で自動車はほとんど見かけない存在であった。

翌朝初めて出会った看護婦に「昨夜の自動車のクラクションがうるさかったが何かあったのか」と聞くと「汪兆銘が亡くなった様ですよ」との返事。時に昭和十九年十一月十日。森光子さんが消息を知りたがっていた。滝仲大尉は、汪兆銘が死亡した翌朝ピストルで頭を打ち自殺した。私はその旨を森光子さんに手紙で知らせてあげた。森光子さんから一度お目にかかって詳しい話を聞きたいとの返事が来たが、来てもらってもそれ以上のことは私は何にもわからないと返事をした。汪兆銘が入院していた病棟は特別な符号で呼ばれていた。その名は亡失。汪兆銘の診療には斎藤教授があたりその下に戸田博先生・太田元治先生、我々は太田先生のことをイ

ショウウインドウ２

ンドのガンジーに因んでガンジーとあだ名で呼んでいた。その間、太田元治先生に召集令状がきて、汪兆銘のところに挨拶に行くと、汪兆銘は「そうか、君にも来たか、しっかりやってくれたまえ」との返事。翌朝、中部二部隊に出頭すると、即日、召集解除となり、返された。太田先生は、これは汪兆銘の働きがあったと推測された。太田先生は続けて、僕の代わりに渡辺軍医大尉がサイパンに行き、サイパン島で戦死した。渡辺君には申し訳ないことをしたと太田先生からいただいた自伝の中に書いている。渡辺軍医大尉は、私が昭和十八年九月一日から二十五日まで中部二部隊と陸軍病院（現在の国立病院）で軍医予備員の教育を受けた時の直属上官であった。不思議な縁で渡辺軍医大尉は私と同じ昭和医専の出身で私に特別に目をかけてくれた。このような縁で私には強く心に残っている事件である。

この頃のことと思うが、私は加藤三九朗先生とは面識がないと思っていたが、あるとき出詰まっている小便の話を思い出し、加藤三九朗先生の手術のお手伝いをしていたことを思い出した。それは、手術後に風呂へ入っている時、斜め後ろ

ショウウインドウ２

から「田ノ井君、この世の中で何が一番気持ちがいいと言ったって、出詰まっている小便をしたとき(爆笑おこる)とか、手術後こうやって風呂に入っているとき、これが一番気持ちがいいな」と言われたことを思い出した。私は昭和二十二年の終わり頃再度、医局に戻った。

斎藤教授の眼力

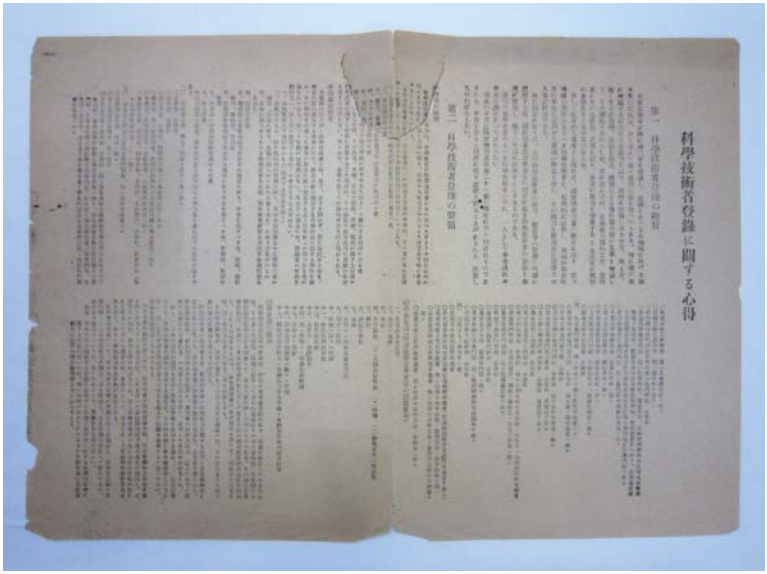
斎藤教授は医局員をきちんと掌握していた。昭和一八年の七～八月頃、私は三菱病院に在職していた。用事があって斎藤教授を訪ねた時、要件を済ませ帰りかけた時、君君と呼び止められ、もう一度そこへ腰かけたまえと指さされた。私が腰かけると、おもむろに口を開き「僕はねえ、今、僕と医局員の間を取り持つ者が居なくって困っているんだ。戸田君(後の戸田教授)はいるけど、彼は自分の勉強は良くするが下の者の面倒は見ないからなあ、そこで今村君(今村勲先生)を助教授にしようと思っているんだが、君どう思うと聞かれた。そんな話、私に聞かれても返事のしょうがない。結構だと思いますと答えると、彼は上の者に信頼され、下の者の面倒を

ショウウインドウ２

ショウウインドウ３

ケース 3-4-1

ケース 3-4-2

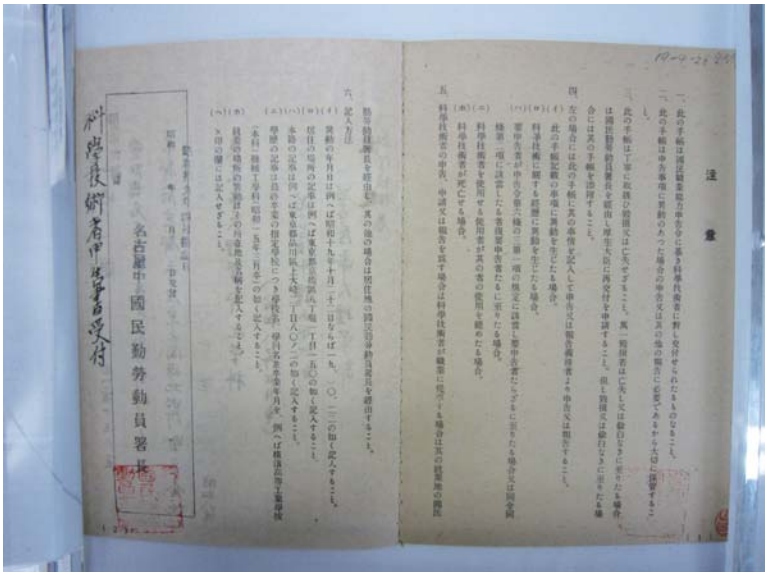


科學技術者登錄に關する心得

第一　科學技術者登錄の趣旨

第二　科學技術者登錄の要領

ケース 3-4-3



注意

一、此の手帳は國民徴用令第十条に基き科學技術者に對し交付せられたものなること、

二、此の手帳は中央事務に異動のあつた場合の申告又は其の他の報告に必要であるから大切に保管すること、

三、此の手帳は丁寧に取扱ひ紛失又は亡失せざること、其の他若しくは紛失又は破損したる場合は國民勤勞動員署長に再交付を申請すること、但し紛失又は破損したる場合には其の事由を記入して申告又は報告すること、

四、左の場合には此の手帳に其の事由を記入して申告又は報告すること、

(一)(ロ)(ハ)(イ)　此の手帳記載の事項に異動を生じたる場合、

(一)(ロ)(ハ)(イ)　科學技術者が中央官公廳の第一種の指定に該當し要申告書になるに至りたる場合又は同令同條第一項に該當したる者後要申告書たるに至りたる場合、

(一)(ロ)(ハ)　科學技術者を使用せざる使用者が其の者の使用を廢めたる場合、

五、科學技術者の申告、申請又は報告を怠り場合は科學技術者が職業に就かざる場合は其の居住地の警察官吏

六、記入方法

(一)(ロ)(ハ)　勤勞動員署長を經由し其の場合は居住地の警察官吏を經由すること、

(一)(ロ)(ハ)(イ)　就職の年月日は例へば昭和十九年十月二十二日ならば、一〇、二二の如く記入すること、

(一)(ロ)(ハ)(イ)　居住の場所の記載は例へば東京都荒川區上大崎二丁目一五〇の如く記入すること、

本籍の記載は例へば東京都荒川區上大崎二丁目八〇ノ二の如く記入すること、

學歴の記載は出身校を其の卒業年月に つき西暦年、學校名を年号年月で、例へば横浜高等工業學校（本科）明治十九年月昭和一五年一月卒）の如く記入すること、

資格の場所の記載は例へば月東京帝國大學病院を病名を記入すること、

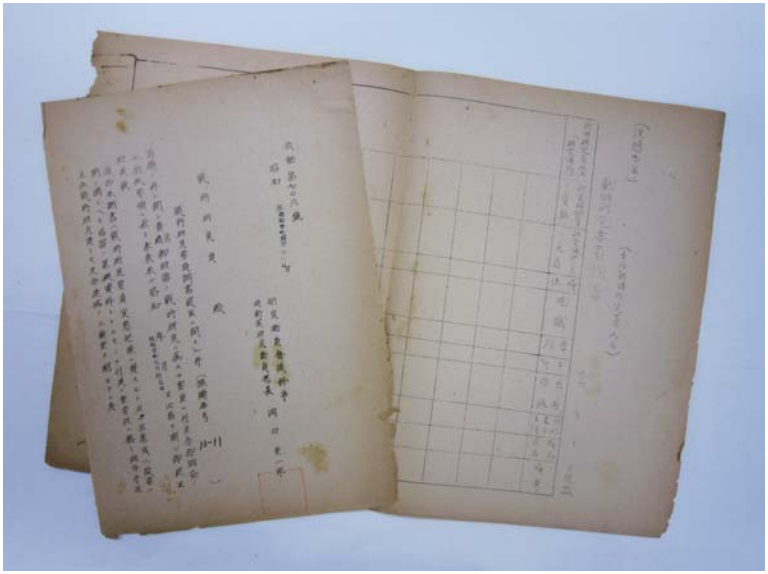
上の欄には記入せざること、

名古屋中國民勤勞動員署長

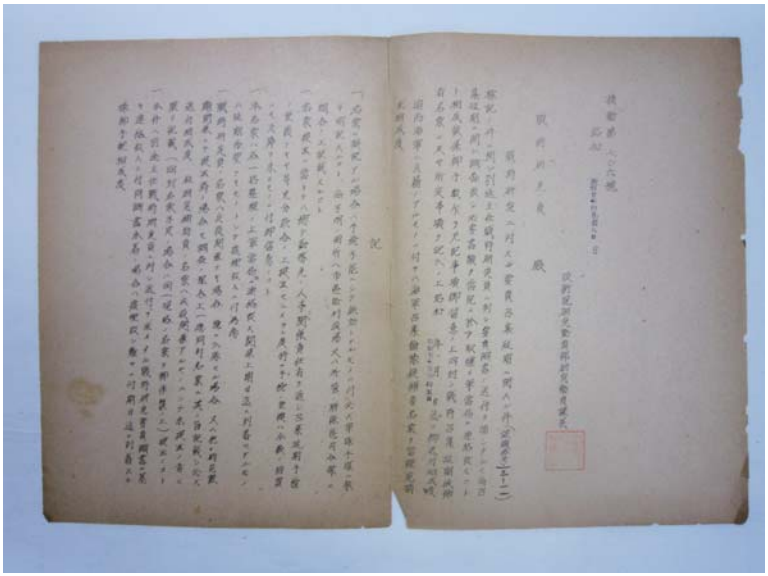
科學技術者申告書受付

ケース 3-4-4

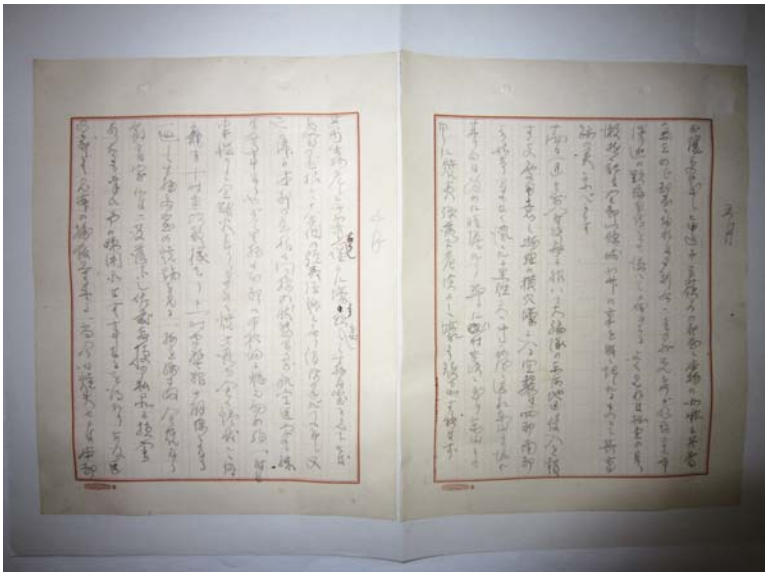
ケース 3-4-5



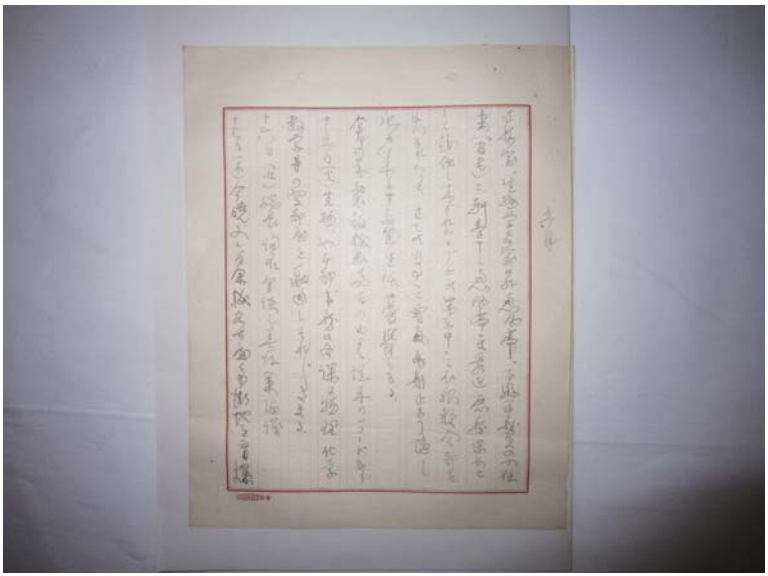
ケース 3-4-6



ケース 3-4-7



ケース 4-1-1（右側）



ケース 4-1-1（左側）

十四日（月）午前八時ごろ警報いで、大編隊の東海地区侵入を報ず。支度用意し物理の横穴壕に入る。空襲は西部南部より始まり、間もなく濛々たる黒煙天に沖し、西風に送られ東山にも流れ来り、白日為めに暗澹たり。然るに八時半頃に至り東山にも切りに焼夷弾落下、危険にして壕より顔も出す能はず。其間、生物危しと云ふ声あり、僅かに壕より頭を出して生物教室を見下せば、教室の屋根に二十余個の焼夷弾燃え居り、消防の手だてもなし。又、之に隣る本部の屋根も同様の状態なるが、航空医学の二棟は無事なり。やがて生物も本部も本格的に燃え初め、約一時間半程にして全舘火となり、間もなく焼け落ち全く惨状言語に絶す。十時半頃敵機去り、十一時半警報も解除となる。一巡して生物教室の焼け跡を見る。一物を残さぬ全焼なり。飼育室には二発落下し、佐藤教授の私品に損害ありたるも、幸ひ予の疎開品は無事なるを得たり。午後医学部より見舞の握り飯等来る。尚今明焼失せるは本部事務室、生物学教室の外、恵風亭、下級事務員の小住宅（官宅）三軒等にして、恵風亭には最近庶務課長として赴任し来られたる丁子氏滞在中にて、衣服類全部を失はれたりと。さて、この火事にて電気瓦斯止まり、随て水も来らず、教室生活は憂鬱となる。

本日の来襲敵機数は四百の由にて、従来のレコードなり。

※カタカナと変体がなは全てひらがなに改めたほか、適宜に句読点、濁点を補いました。

ケース 4-1-1（活字）

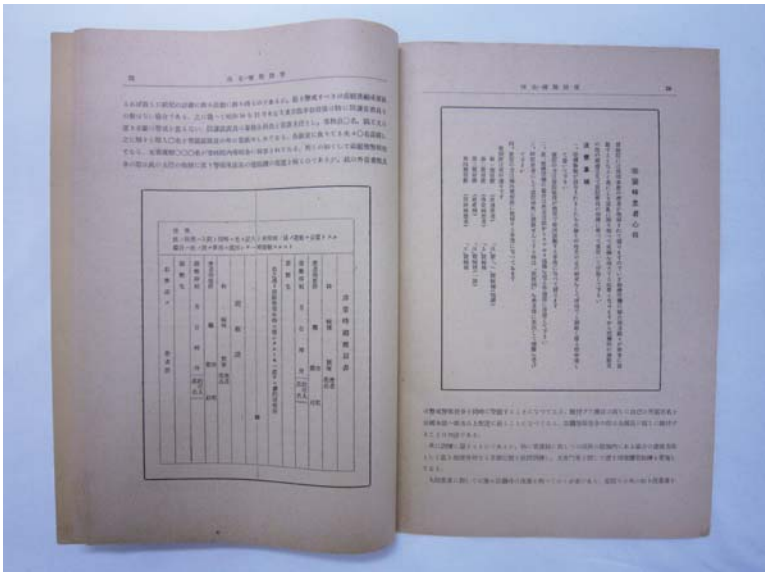
名古屋帝国大学の空襲被災状況

（昭和23年4月1日調）

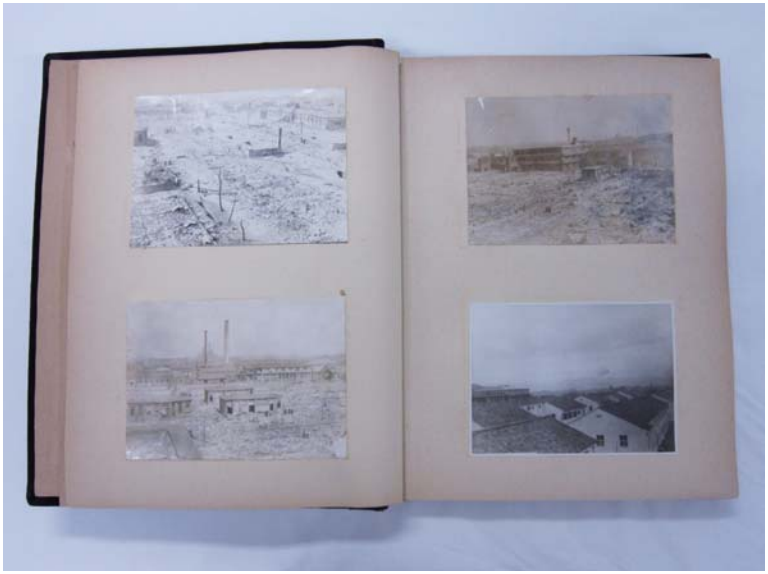
部局	被災月日（昭和20年）	所在地（すべて名古屋市内）	建物坪数		焼失率（%）
			戦災前	焼失	
医学部	3月12日・19日	昭和区鶴舞町	3,818	3,711	97.2
附属医院	3月25日	同上	12,623	6,474	51.3
附属図書館	同上	同上	451	0	0
附属医院分院	3月19日	中区新栄町	1,135	47	4.1
本部	5月14日	千種区不老町	657	497	75.6
理学部	同上	同上	1,777	219	12.3
航空医学研究所	同上	同上	458	99	21.6
雇員宿舎	同上	同上	46	46	100
工学部	同上	東区西二葉町（仮校舎）および千種区不老町（1943年1月28日より移転中）	6,418	4,831	75.3
学生宿舎	同上	東区長久葉町	0	0	0
官舎	5月17日	千種区松竹町 昭和区広瀬町	88	88	100
合計			27,472	16,012	58.3

戦災を受けなかった名古屋市外の附帯建物・施設は除きます。
部局の名称は被災時点のものです。
（『昭和二十年五月十四日空襲被害状況調』『昭和二十年五月十七日空襲被害状況調』『昭和二十年度文部省通達綴』および『昭和二十三年名古屋大学概況』より作成）

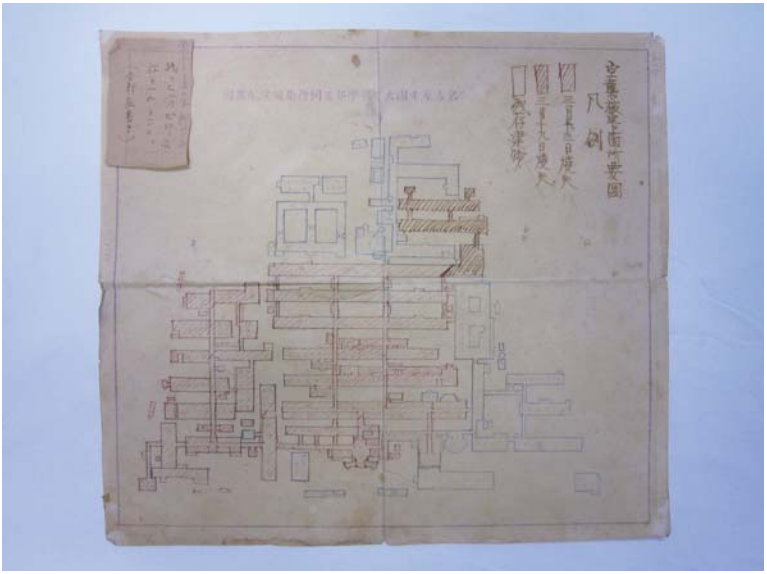
ケース 4-1-2



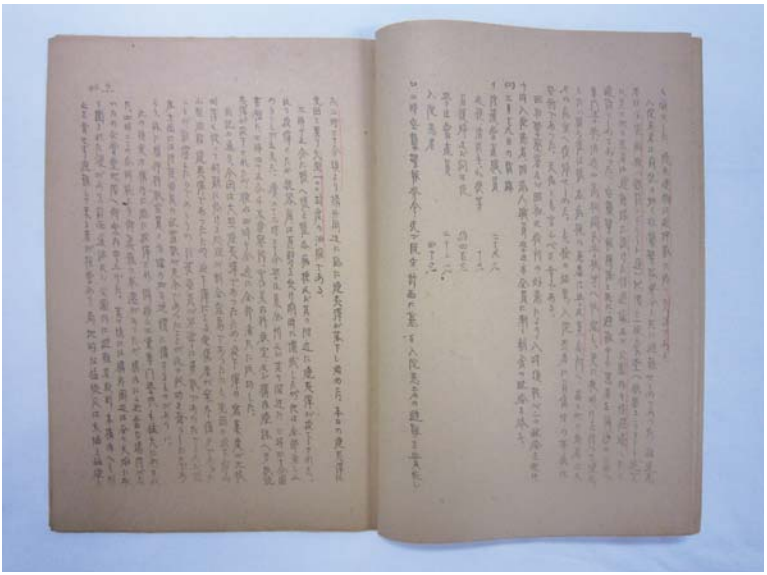
ケース 4-2-1



ケース 4-2-2

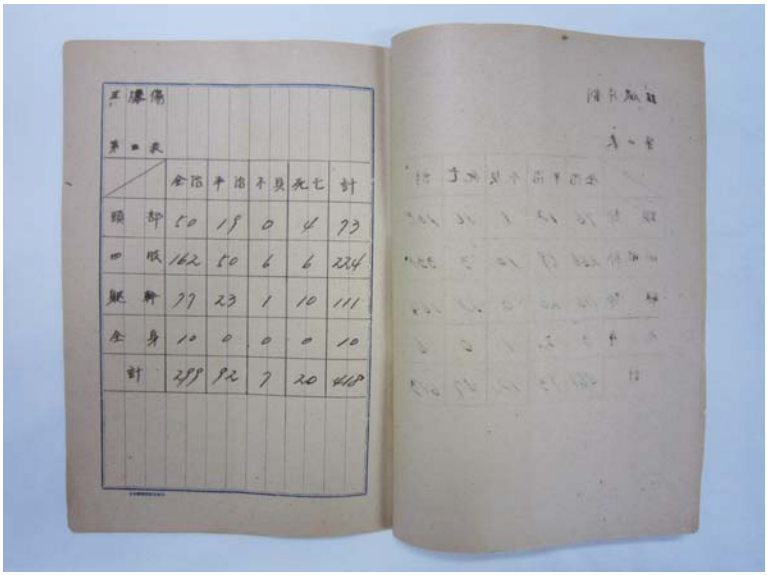


ケース 4-2-3



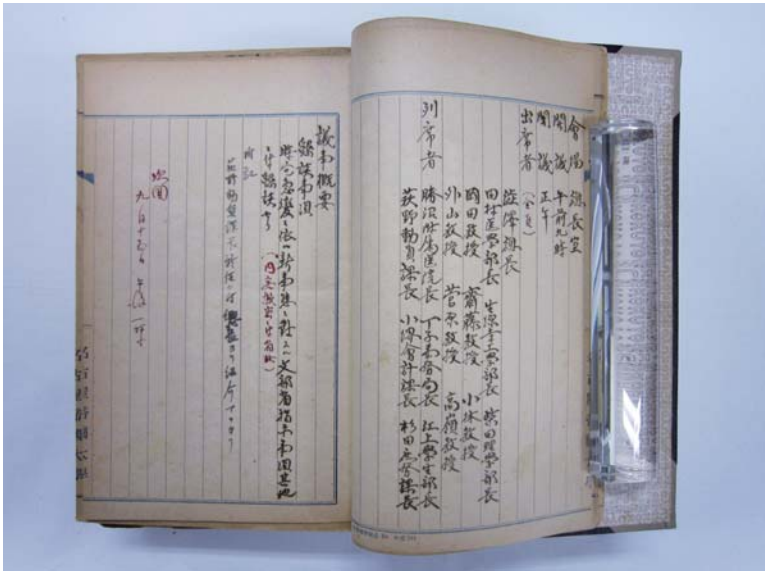
ケース 4-2-4

ケース 4-2-5

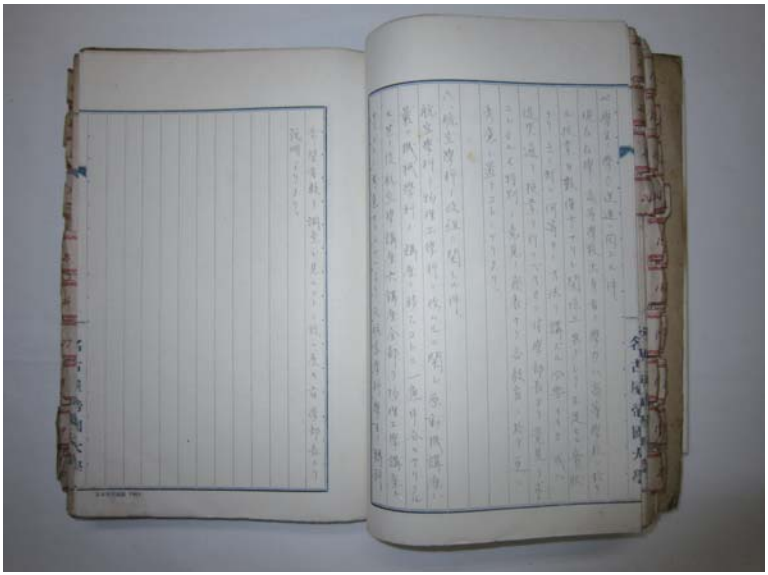


ケース 4-2-6

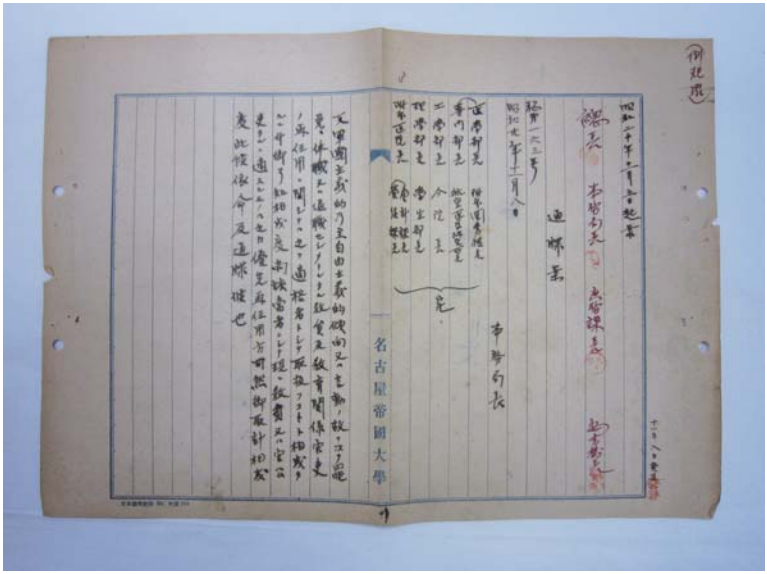
第 5 コーナー



ケース 5–1



ケース 5–2



ケース 5–3

注

(1) これらについては、西川輝昭「名古屋大学博物館第四回特別展記録　名帝大けふ誕生―初代総長渋澤元治とその時代」（『名古屋大学博物館報告』第一八号、二〇〇二年一二月）、堀田慎一郎・山口拓史・羽賀祥二・西川輝昭「第一五回名古屋大学博物館企画展記録　伊吹おろしの若者たち―八高創立百年の歴史から―」（『名古屋大学博物館報告』第二四号、二〇〇八年一二月）、堀田慎一郎「大学アーカイブズの展示活動とその諸問題―名古屋大学における「八高展」を事例に―」（『名古屋大学大学文書資料室紀要』第一七号、二〇〇九年三月）、堀田慎一郎「企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念―』」（『名古屋大学大学文書資料室紀要』第一八号、二〇一〇年三月）、堀田慎一郎・西川輝昭・羽賀祥二・蛭薙観順・山口拓史「第一九回名古屋大学博物館企画展記録　医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念―」（『名古屋大学博物館報告』第二七号、二〇一一年一二月）、堀田慎一郎「企画展『響け！　創統の鐘―名高商から名大経済学部への九〇年―』」（『名古屋大学大学文書資料室紀要』第一九号、二〇一一年三月）、西田佐知子・堀田慎一郎・松下佐知子「第二八回名古屋大学博物館企画展記録　「氷壁」を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯―」（『名古屋大学博物館報告』第二九号、二〇一三年一二月）、拙稿「企画展『「氷壁」を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯―』」（『名古屋大学大学文書資料室紀要』第二二号、二〇一四年三月）を参照。

(2) この三年計画の詳細は、蒲生英博「近代医学の黎明　デジタルアーカイブ―医学部史料室へのご招待―」（『館燈』一八二号、二〇一二年一月一五日）と、蒲生英博「医学部図書館における医学史資料の保存と活用：「近代医学の黎明デジタルアーカイブ」と展示会」（『生物学史研究』九一号、二〇一四年一一月）を参照。

(3) 附属図書館医学部分館のミニ展示会の詳細については、蒲生英博「医学部図書館における医学史資料の保存と活用：「近代医学の黎明デジタルアーカイブ」と展示会」（『生物学史研究』九一号、二〇一四年一一月）を参照。第六回ミニ展示会「戦争と大学」以降は、第七回「千年の医書―平安時代から江戸時代までの古医書の世界―」、第八回「医心　絵心―医師たちの画力―」を開催し、二〇一五年二月一三日からは、「建物に見る病院と医学校の歴史」を開催している。

(4)「近代医学の黎明デジタルアーカイブ」は、二〇一〇年一〇月にプロトタイプを公開後、二〇一一年一二月から正式に公開している。公開資料は毎年増加しており、古医書、文書等は、基本的にデジタルブックとして全ページ読むことができる。二〇一五年二月からは、英語版も公開している。URLは、http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/である。

(5)『毎日新聞』二〇一四年二月一一日朝刊「医療従事者を重視―アジア太平洋戦争と旧名医大のかかわり」。

(6)『名古屋大学発見サイトCheers! 名大生ブログ』二〇一四年二月一八日「附属図書館医学部分館ミニ展示会『戦争と大学』に行ってきました」。

(7)『中日新聞ショッパー』二〇一四年三月六日「研究・教育・医療の分野に及ぼした戦争の爪痕」。

(8)『朝日新聞』二〇一四年四月五日朝刊「戦時下の名大語る資料―図書館医学部分館、保管分を展示」。

(9)『NHK』二〇一四年五月二六日ほっとイブニング「特集　明らかになる戦時下の名大」と、二〇一四年五月二七日おはよう東海「リポート　明らかになる“戦争と大学”」。

(10) 二〇一四年一〇月、名古屋大学発行、名古屋大学大学文書資料室編、A五版、四三頁、オールカラー。同年一〇月一八日の名古屋大学ホームカミングデイにおいて、入場者全員に配布した。入手を希望する方は大学文書資料室まで。

(11) ただし、本企画展全体の流れの中で不必要と筆者が考えた部分、あるいは本室の展示パネルで説明されている部分等の削除、あるいは筆者が必要と考えた説明の加筆などは適宜おこなった。また、鶴舞における展示会では、展示資料のキャプションは漢字が原物の旧字体を生かしてそのままになっていたが（解説文は新字体）、東山の企画展では堀田の判断で全て新字体に直した。本稿でも同様である。

(12) 後掲の一覧表に掲載した展示パネルのうち、第一九回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで」で展示したパネルについては、前掲堀田「企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念―』」を、名古屋大学広報誌『名大トピックス』掲載の「ちょっと名大史」の記事をパネル化したものについては、名古屋大学のホームページ掲載の同誌バックナンバーか、大学文書資料室のホームページ掲載の「ちょっと名大史」バックナンバーを参照。

(13) インターネットサイト（http://sangakusha.obunko.com/nikki.html）でも公表されている。

(14) このマイクロフィルムおよびデジタルデータは、まだ一般公開していない。
(15) 展示した部分の活字化にあたっては、上村泰裕氏のご教示を得た。
(16) 「公文書等の管理に関する法律」(平成二十一年七月一日法律第六十六号)、いわゆる公文書管理法では、歴史資料として重要な公文書その他の文書を「歴史公文書」といい、そのうち「国立公文書館等」(国立公文書館もしくは政令で定める施設)が受け入れたものを「特定歴史公文書等」という(第二条)。また国立公文書館等は、特定歴史公文書等を展示その他の方法により積極的に一般の利用に供するよう努めなければならない(第二十三条)。そして大学文書資料室は、内閣総理大臣から国立公文書館等としての指定を受けている。
(17) 新聞では、『朝日新聞』二〇一四年八月四日朝刊「「戦争と大学」考える企画展」、『中日新聞』同年八月七日朝刊「戦後69年 森光子さん戦禍に揺れぬ恋」、『読売新聞』同年八月一四日朝刊「「戦争と大学」名大企画展」、『朝日新聞』同年八月二三日朝刊「森光子さん戦中の恋」など。

(がもう・ひでひろ　附属図書館医学部分館／ほった・しんいちろう　大学文書資料室)